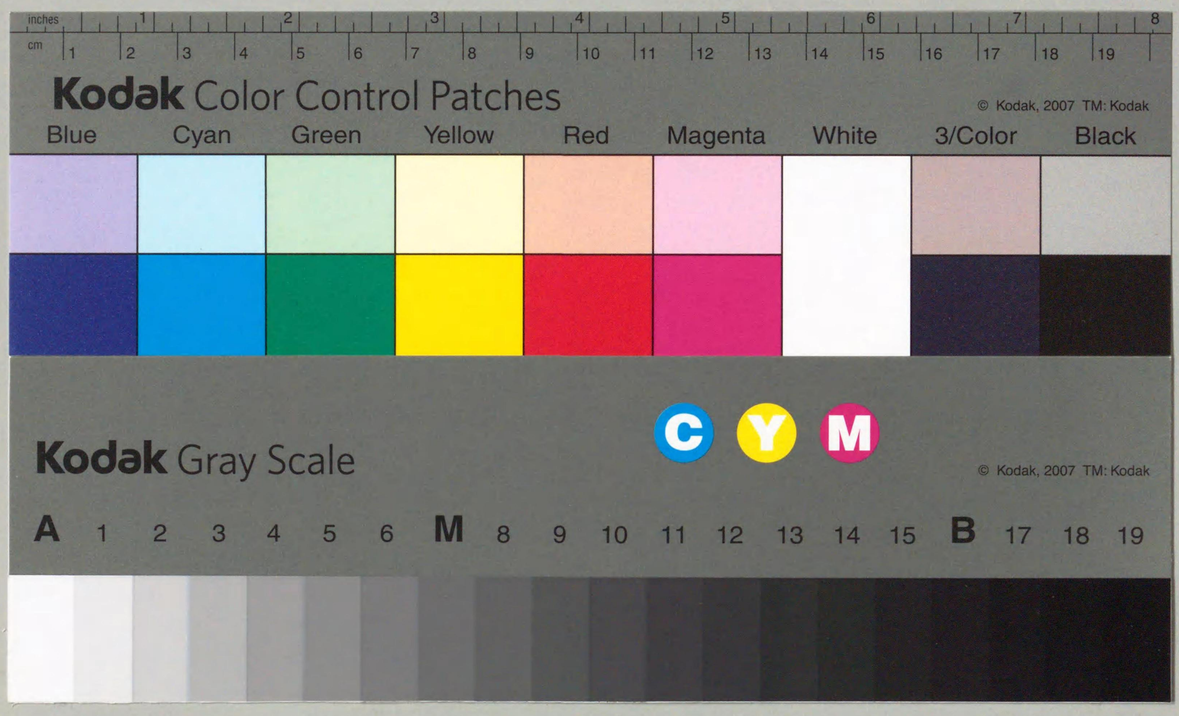


特46
810
特46-810
1200500894628
少年日露戦史 9
遼陽の巻
国立国会図書館

少年日露戰史

巖谷小波編

第九編 遼陽の卷

附軍國讀本第九

220
579

博文館發行

特46
810

巖谷小波編

少年日露戰史

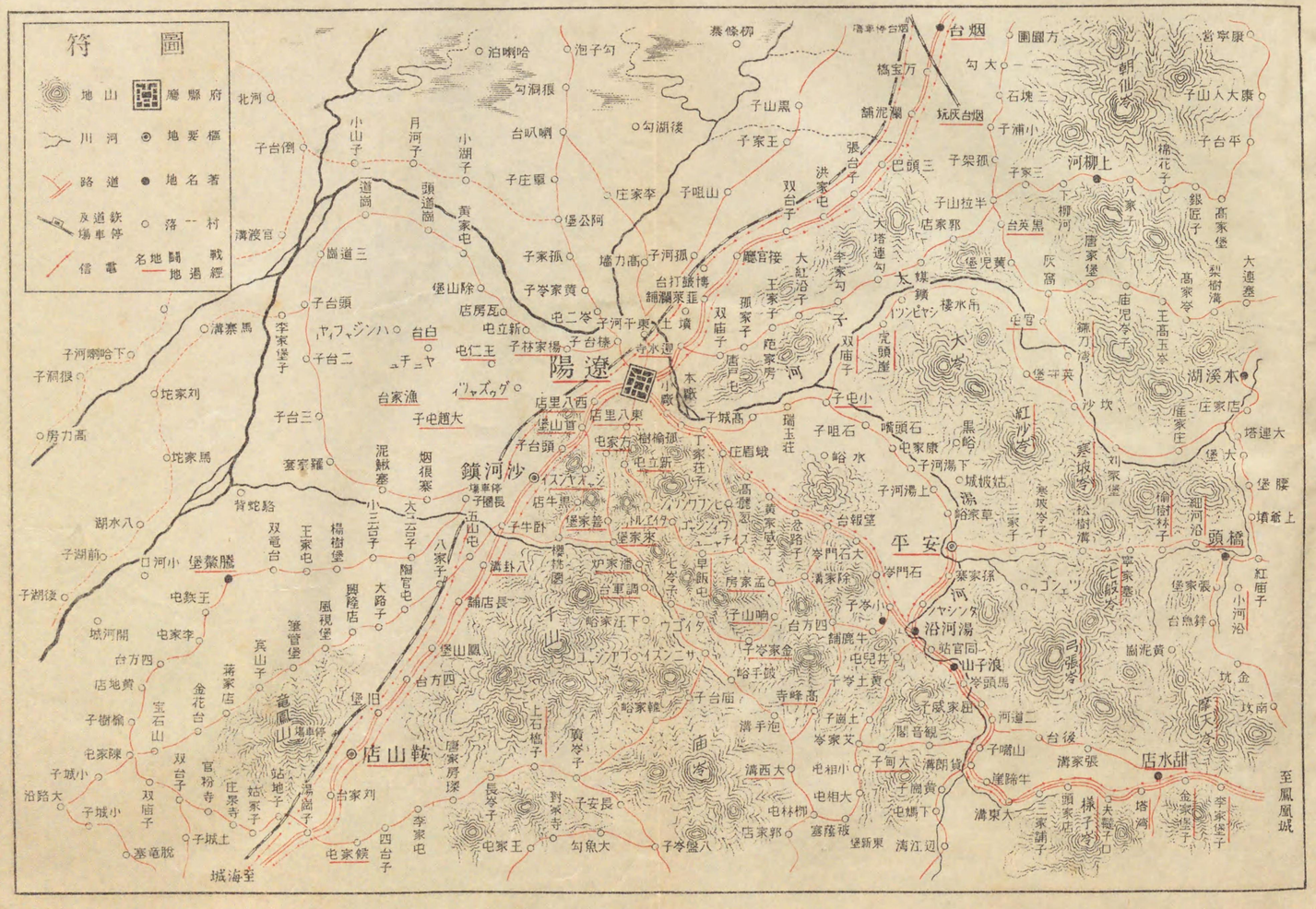
第九編 遼陽の卷

附軍國讀本 卷の九

東京 博文館

明治
38 3 8
交内

遼陽附近之地圖



凡例

一少年日露戰史は、今の少年の爲めばかりで無く、今から後の少年の爲めにも、帝國空前の大事業を永く記憶させる爲めに、日露の戰爭を書いた本であります。

一附錄軍國讀本は、日露戰爭に關係した、美談や逸事を讀本體に書いて、忠君愛國の好模範を、永く少年に示す爲めの本であります。

少年日露戰史 第九編 遼陽の卷目次

口畫

梨本宮殿下、首山堡の一角◉梅澤枝隊長、太子河徒涉◉關谷聯隊長と橘大隊長◉遼陽砲擊及同高塔

本文

第一章 遼陽の敵……一
第二章 三軍の連絡……五
第三章 黑木軍の右縱隊……一〇
第四章 太子河左岸の占領……一八
第五章 太子河右岸の激戰……二四
第六章 名譽の岡崎山……二九
第七章 激烈なる追擊戰……三三
第八章 野津軍の戰況……三七
第九章 奧軍の活動……四九
第十章 首山堡の苦戰……五二
第十一章 悲慘なる關谷聯隊……五五
第十二章 遼陽城の日章旗……六二

附錄 軍國讀本 卷の九 目次

一 梨本宮殿下の御仁德……一
二 負傷したる小川中將……五
三 學者將軍……九
四 名譽聯隊の名譽勇士……一五
五 陸軍の軍神……一八
六 勇烈なる喇叭卒……二四
七 池月少尉の最期……二八
八 死して放さぬ武器……三三

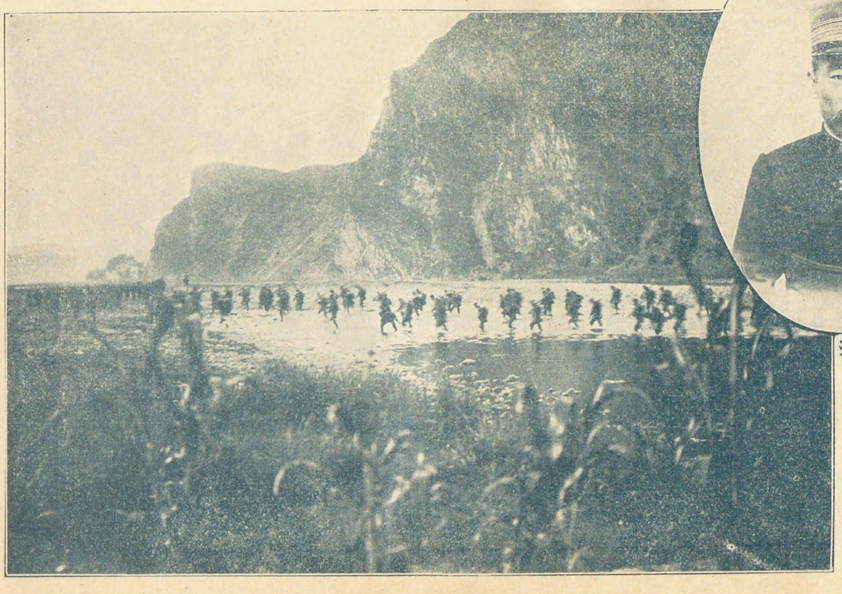
插畫

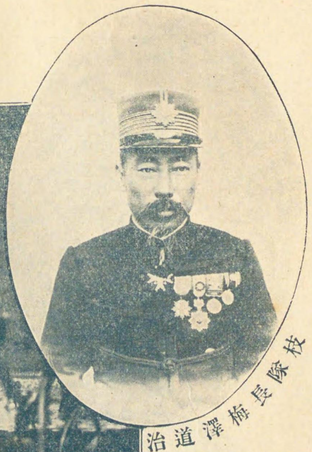
▲先鋒の偵察……六
▲砲戰石圖……一三
▲屏風山の激戰……二〇
▲敵陣の輕氣球……四〇
▲敵砲壘の必死の防禦……四六
▲首山堡の苦戰……五六
▲遼陽の占領……六四
▲小川中將の危難……七
▲大久保中將の剛膽……一二
▲管理部の苦心……二六
▲勇烈なる喇叭卒……二四
▲死して放さぬ武器……二四

梨本宮殿下

鹵獲重砲の射撃

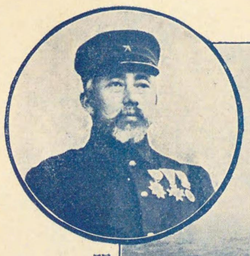
太子河上流の徒渉



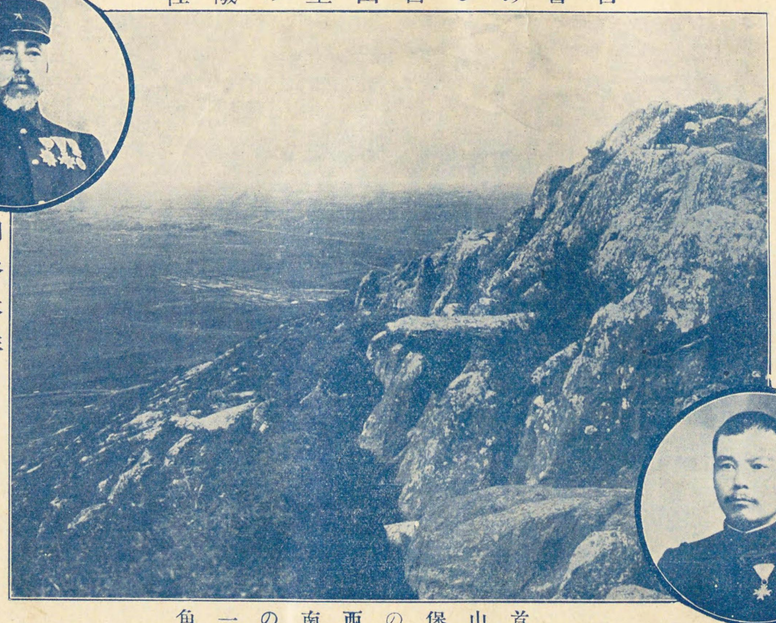


枝隊長栃澤道治

名譽ある首山堡の犠牲

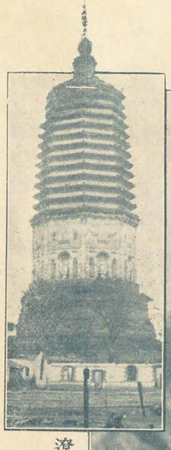


關谷大佐



首山堡の西南の一角

橘少佐



遼陽の高塔

遼陽の兵火

少年日露戰史

巖谷小波編

第九編　遼陽の卷

第一章　遼陽の敵

遼陽！　遼陽！　實にこの遼陽の名は、日露の戰爭が開かれると同時に、我々同胞の間に傳はつて、一日も忘れる事が無かつたのであります。

さてその遼陽が、何うしてまた其の樣に、大切に思はれたのでありませうか？

南滿洲の要地
關ヶ原
長白山脈
遼河平原

遼陽の敵

蓋し此遼陽は、南滿洲に在る最も肝要な土地で、此所を取ると取らないとは、我軍の作戰計畫に、非常な利害があるからであります。されば又敵の方でも、初めから此所に根據地を占め、出來る丈の防備を堅めて、我が大軍に當らうとしましたから、此の遼陽の一戰こそ、彼の關ヶ原の合戰の如く、天下分目の戰であらうと、誰も思はぬ者はありませんでした。

今地圖を開いて見ますに、その遼陽の地は、鴨綠江の邊から來て居る、長白山の山脈と、遼河の邊にある平原との、丁度境目にありまして、遼東半島は云ふに及ばず、韓國の西北及び遼河の平原から來る道が、皆此所に集つて居ますから、所謂る四通八達の要路に成つて居るのであります。

唐の太宗の古跡
清帝祖先の地
十四個師團の敵

殊にまた此土地は、今から凡そ千三百年前、今の清國が唐と云つた時分、時の天子の太宗が、高麗と云ふ、其頃の韓國を征めに來た時、此所に馬を留めたと云ふ、名高い古戰場でありまして、今もこの時の紀念には、立派な高塔も殘つて居る位です。

また今の支那帝の祖先、愛親覺羅氏の起つた奉天府も、此所からはもう遠く無いので、其後此所にも都を遷した事がありますから、隨つて大分開けて居りました。

かゝる大切な所でありますから、敵は例の東淸鐵道に依つて、續々と兵力を是に集め、實に彼の大戰の時には、百七十三個大隊、我軍の凡そ十四個師團餘の步兵に、百三十八中隊の騎兵、五百五十門の野砲と云ふ、恐ろしい大軍と

クロパトキンの所在地

遼陽の敵

共に總指揮官クロパトキンも、此所に陣取つて居るのであります。

斯る大敵の在る所、我軍もまた大兵を以つて、是に當らなければ成りません。

されば我が總司令部は、第一、第二、第四の三軍を以つて、三方から是に攻め寄せ、一擧に敵を擊ち拂はうと云ふのを、初めからの作戰計畫として居ました。是を思へば、彼の鴨綠江と云ひ、樣子嶺と云ひ、分水嶺と云ひ、柝木城と云ひ、得利寺と云ひ、大石橋と云ひ、何れもこの大戰の前の、準備の小戰に過ぎないのであります。

準備の戰

然るにその準備の戰爭の、何の方面も着々と効を奏して豫定の通り敵を追ひ詰め、三軍が一度に呼吸を揃へて、敵を衝く事の出來たのは、何と云ふ愉快な事でありませう。

若し此時に、たとひ何の一方でも、敵の逆襲の鋭さに、歩を進める事が出來なかつたら、折角の作戰計畫も、何の役にも立ゝなく成り、それこそ何樣な面倒が起つたか知れません。

さては是も天佑でありませうか？否、敵の腰が弱い故であります。否、否、全く我軍が强い故であります。

三軍の連絡

遼陽を去る十四五里

第二章　三軍の連絡

さても强い我軍は、如何にして敵に迫まりましたらう？

右翼の黑木軍は、六月の初に於て、遼陽を去る僅か十四五里の、塞馬集、懷仁の邊まで進んで、頻りに敵を挑む樣にし

先鋒の偵察

三軍の連絡

第二章

海城

右翼と中央軍の連絡

て居ましたが、敵は鴨綠江の戰爭以來、この黑木軍の勇猛には、鬼の如く恐れて居りましたから、此の方に許り心を配つて、我が作戰の計畫を、よく見る事が出來ませんでした。

その間に野津軍と奧軍とは、南の方から進んで行つて、これも遼陽から十三四里手前の、海城まで來ましたから、黑木軍はまた進んで、樣子嶺、楡樹林子を占領し、此所で中央の野津軍と連絡し、右翼は更に前進して、途に屢々敵の斥候を捕へ、また土人に敵の樣子など聞きながら、遂に遼陽の北の方、卽ち敵の退路へと廻りました。

で、ついには遼陽の敵を、三方から包む事に成りましたから、茲にいよ〳〵豫定の如く、滿洲軍總司令部の指揮の

右翼軍八月二十五日出發

中央左翼は二十六日出發

接線十日間戰線十數里兵員十數萬死傷一萬二千

下に、大攻擊を初める事に成りましたが、實に八月の下旬の事であります。

此時黑木大將の右翼軍は、二十五日を以て進擊を初め、湯河を二十七日に渡つて、太安平、湯河沿を奪ひ、三十日には太子河を渡つて、九月の二日に黑英臺を取つて、遂に敵の背後に出ました。

又、野津大將の中央軍と、奧大將の左翼軍とは、始終同じ運動を取つて、二十六日に進擊に掛り、翌二十七日には、鞍山店を乘取り、九月の一日に首山堡を奪ひ、遂に九月四日を以て、首尾好く遼陽を占領しました。その間實に十日許り。戰線十數里に渡つて、兵を動かす事十數萬！死傷の數一萬二千！何と恐ろしい大戰ではありませんか！

さらばその大戦を、順を逐うて是から語りませう。

第三章　黒木軍の右縦隊

黒木軍の右縦隊

時は八月二十五日、午後七時の事であります。勇氣充ちたる我が第一軍は、出發前進の命を受けて、さながら大蛇の搖ぎ出づる如く、堂々として運動を初めましたが、十二師團を以て成り立つた、右縦隊の木越部隊は、その夜の一時頃に、苦も無く北八盤嶺を占領し、又その一枝隊は、續いて北八盤嶺の支脈にある、摺鉢山へと向ひました。

十二師團木越部隊

北八盤嶺

折から敵は狼狽ながらも、一個聯隊許りを以て、激しく逆襲して來ましたが、程無くこれをも擊退し、猶も進んで行きますのに、此邊は一帯の岩山で、足場が至つて悪いも

岩山の激戦

のですから、思ふ様に進めません。

紅沙嶺の敵砲

所をまた敵は、巧みに岩の間に隠れて、我に向つて狙撃をし、紅沙嶺の峠からは、砲を頻りに撃ち掛けますので、一時は苦戦の體に見え、平井枝隊長の如きは、自ら敵前に現はれて、部下を勵ました位であります。

北溝

すると右手の北溝には、一大隊許りの敵兵が居て、健氣にもその銃口を揃へ、我が右側面を猛烈に射撃し、又北の方の山の上からは、盛んに砲火を降らせましたから、更に苦戦に陥りましたが、その中に我が山砲隊が、北八盤嶺の谷間まで進んで、激しく敵を撃ちましたので、忽ちの中に敵砲二門は、微塵に破られてしまひました。

我山砲の效力

けれども何分此邊は、岩石許り凸起して居て、兵が二人

砲戰石闘

黒木軍の右縦隊

黒木軍の右縦隊

我陣地不利

とは竝んで進めず。進めば直ぐに狙撃されると云ふ、如何にも地理の悪い所ですから、味方は心許り焦せつて、如何する事も出來ません。

石合戰

其爲めに我軍は、朝の中に占領すべき此の地を、午後に成つても乘取る事が出來ず、大いに殘念に思つて居りますと、敵も一生懸命戰つて、果は彈丸も無く成つたと見えまして、今度は例の石合戰と成り、シヤツ一枚に成つて、大きな岩を兩手に抱へ、我に向つて投げ出しましたので、此方も同しく石を取つて應戰し、此爲めに敵味方とも、死傷の數を殖やしましたが、やがて日の暮れかゝる頃、流石頑強の敵も、遂に根氣を盡かしまして、こそ〳〵退却を初めましたから、味方は勇氣一倍し、その虚に乘じて猛烈に攻め立て、果は此邊の敵兵を、殆んど全滅させてしまひました。

橫尾西岡兩中隊長の戰死

原田枝隊屹立山屏風山

また同し木越部隊の、左翼として進んだ原田枝隊は、途中の敵を追ひ退けつゝ、二十六日の曉方には、屹立山を占領し、更に前面の屏風山へと向ひました。

所がこの山も、その名の屏風と云はれる通り、岩を切り立つた樣な嶮山で、行進の困難一方ならず、その上北溝の敵砲に、酷く射撃されまして、午後四時頃に至るまで、必死に戰ひましたけれども、一歩も進む事が出來ません。

所へまた五時頃に成つて、激しい夕立が降りましたので、殘念ながら攻撃を見合せましたから、要するに木越隊は、

黒木軍の右縦隊

今村部隊
椙原枝隊
小寒坡嶺

此日紅沙嶺から北の方のみ、占領する事が出來ましたけれども、南へはまだ進めなかつたのであります。

さて此の木越隊と竝んで、右縦隊の左翼には、今村部隊が進みましたが、その中の椙原枝隊は、二十五日の夜から出て、翌日の午前一時前には、もう小寒坡嶺まで進みました。

大寒坡嶺

此時敵は、はやくも我軍の前進を知つて、猛烈に射撃を初めましたが、味方はわざとこれに應ぜず、高粱の茂つて居る中を、息を殺して敵に迫まり、やがて二百米突許りの距離に成つてから、不意に突貫を初めまして、忽ちの中に小寒坡嶺を奪ひ、更に進んで大寒坡嶺に向つたのです。

所が此地の敵兵は、味方よりも數が多く、その上一生懸

椙原隊

命に陣地を守つて、味方を撃退しやうとしますから、椙原隊も容易には進めず、暫時は苦戰の有樣でしたが、幸にして戸澤大隊が、本隊から援兵に駈けつけましたので、これに非常の勇氣を得、曉方の六時頃には、大寒坡嶺の要害も、遂に我手に落ちました。

戸澤大隊
八盤嶺

それから右縦隊の一番左には、竹下枝隊が當つたのです。これも二十五日の夜に乘じて、直ちに八盤嶺の敵に向ひ、殆んど一發も放さぬ中に、直ちに突撃に掛りましたが、中には古の合戰の樣に、銃劍を棄てゝ組討をする者さへあり、入り亂れて奮闘した揚句、とう〳〵敵を破りましたから、更に勝に乘つて、西の方の谷間に追詰め、椙原隊が三家子を占領したと同時に、竹下隊は八盤嶺から、七盤嶺の要害

竹下枝隊
七盤嶺

黒木軍の右縦隊

安平の逆襲

太子河左岸の占領

をも、見事に占領してしまつたのであります。

かう云ふ風に、右縦隊の諸隊は、勇敢無雙の働きを以て、敵の恃んで居た要害を、皆奪ひ取つてしまひましたが、敵はまた此勢に、その守を棄てましたのを、殘念に思つたと見えまして、二十六日の午前十一時頃には、兵力を非常に增して、安平の方面から、さながら潮の湧く如く、我に向つて逆襲を試みました。

第四章　太子河左岸の占領

此時敵の砲兵は、三十七門の砲列を、安平附近の高地に敷いて、我が大寒坡嶺の陣地をば、盛んに擊ち立てますので、我山砲隊も、直ちにこれと砲火を交へましたが、何分

戰爭中の大雷雨

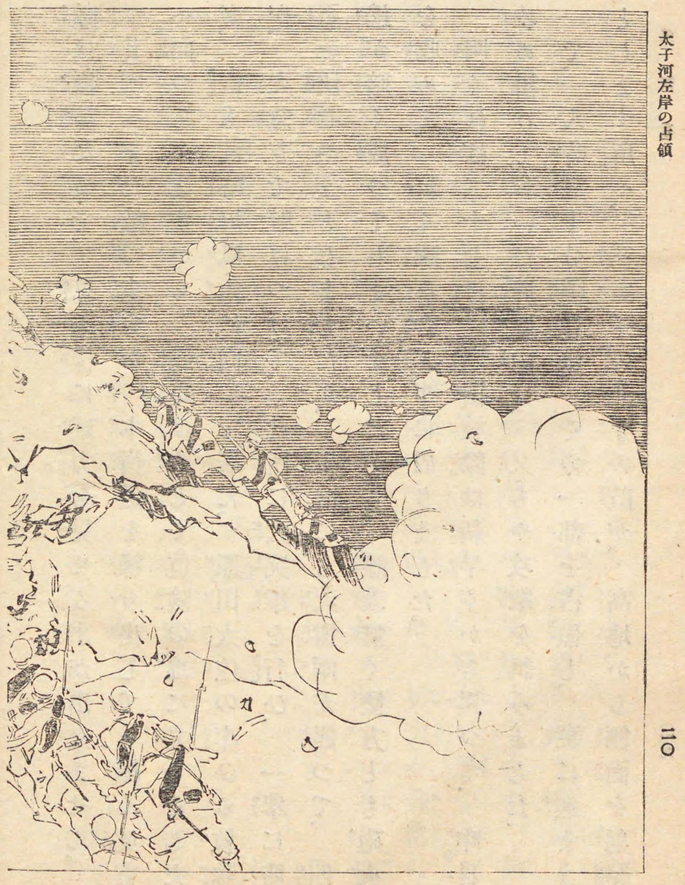
屏風山再攻擊

敵は優勢なので、思ふ樣に威力を見せる事が出來ません。其所へまた敵の主力が、本街道を繰り出して、續々此方へ向つて來ますから、我軍は少しく危險の地に立ちましたが、恰も此時屏風山に向つて居た、原田大佐の率ひる枝隊が、大急ぎで駈けつけて、此所に大突擊を行ひ、一擧に勝負を決しやうとしましたが、生憎にも大雷雨が起つて、四邊が暗く成つてしまいましたから、餘義無く雙方とも砲火を收めて、暫く睨み合ふ事に成りました。

明くれば二十七日、原田枝隊は朝早くから起つて、昨日攻め掛けておいた屏風山に、又もや攻擊を試みました。

で、八時三十分頃には、その一部を占領し、更に進まうとします所へ、三家子の北手の敵が、高地から側面を射擊

屏風山の激戦



太子河左岸の占領

三家子
大安平
島村少將

するので、此爲めに妨げられ、一歩も進む事が出來ません。けれども味方は更に屈せず、今度は方面を更へまして、岩を攀ぢ石を這ひながら、東北の山腹を廻つて、どつと敵に攻め掛りましたから、流石の敵もこれに驚き、遂に午後三時を以て、此陣地を明け渡してしまいました。

又左翼の今村部隊は、中央縦隊と連絡して、三家子附近の敵を追ひ、大安平の近所から、東に亙る高地を占めましたが、同じく二十七日には、前面の敵の兵力が加はり、容易に進む事は出來ません。

尤も此時此隊は、今までの今村大佐に代つて、島村少將がこれを率ひて居ましたが、丁度午後の三時頃、敵の退却の樣子を見て、總進撃の號令を傳へました。

屹立山
黒峪 コヂヤゴウ
太子河湯河の接合點

かくと見た原田枝隊は、同時に屹立山に向つて攻撃を初めますと、敵は三家子の北方の山に、頑固にも踏み止まつて、暫時抵抗を試みましたが、五時頃にはもう力盡きて、一散に逃げ出しましたから、遼陽の右側の敵の防禦は、皆我軍の破る所と成り、敵は一散に遼陽をさして、逃け込まねば成らぬ事に成りました。

そこで我右縦隊は、二十八日に紅沙嶺を越え、黒峪からコヂヤゴウかけての地を、一帯に占領する目的で、勢鋭く進みましたが、もう此時は敵兵も、只退却する許りですから、夕方までには目的の地を占め、更に一部の兵を派して、太子河と湯河の合して居る、半島形の所まで占領しました。所がその左翼隊のみは、中央縦隊と共に進まねば成らぬ

大石門嶺
石垣子

太子河右岸の激戰

ので、大石門嶺から石垣子に亙る所を、まだ十分に占領する事が出來ず、而も石垣子の北の方からは、頻に砲彈が來ますから、我軍は谷に沿ひ岡に隱れ、辛くも前進が出來ぬ位です。

其中に此隊も、見事敵を追ひ拂つて、遂に太子河の左岸まで出ましたが、此所から見ると遼陽の市街は、つい眼の前に横はり、茫々とした遼河平原を、黑煙立てゝ走る汽車までが、手に取る樣に見えますので、士卒の元氣また百倍し、思はず萬歲を叫びました。

第五章　太子河右岸の激戰

さて右縱隊は、太子河の左岸から、湯河と落合ふ所まで

梅澤枝隊
臥龍村
江家屯

鎌刀灣
燕巢城

皆手に入れてしまひましたから、今度はその右岸に居る、敵の樣子を探る事と成りました。

然るに敵も、此河を渡られては成るまいと、それ〳〵手配がしてある樣子ですから、智畧に富んだ黑木大將は、陽に下流を押し渡る風をして、實は上流の淺瀨を見屆け、まづ梅澤枝隊と云ふ別働隊を、最も上流の臥龍村から渡つて、本溪湖の方へ向はせ、また工兵隊を黑峪に集めて、江家屯の近邊に、大きな軍橋の架けられる樣に、十分用意をさせました。

そこで三十日の夜半には、前衞の木越隊が、鎌刀灣から太子河を涉り、直ちに燕巢城の岡に出て、架橋工事の掩護をする事に成りました。

太子河右岸の激戦

二條の軍橋

岡崎部隊

一體敵前に橋を架け、それを渡つて行く事の、非常に危險な仕事であるのは、已に鴨綠江の戰でも知れて居ますが、殊に此時の木越隊は、只に架橋を掩護する許りか、事に依つたら遼陽の敵の、退路を遮らうと云ふのですから、その任務はまた非常に重いのです。

然るに大膽なる木越隊の、掩護宜しきを得たものですから、我が架橋隊は、三十一日の夜明までに、鐵の舟で造つた軍橋を、二條まで見事に架け了りましたから、その午前八時頃から、右縱隊まづこれを渡り、續いて中央縱隊の、岡崎部隊が渡つて行きました。

するとその大軍が、已に太子河を渡つたのを聞きまして、敵は大きに狼狽へ出し、俄かにその大軍を擧げて、此の黑木

黑英臺と寒屯

九月一日

茨兒山

五頂山

馬場谷山兩大佐

軍へと當らせましたが、その勢凡そ我が數倍、容易ならぬ事に成つたのであります。

で、黑英臺の敵砲と、寒屯の我が山砲とは、頻りに砲火を交へましたが、それ等は物の數にも成らず、越えて九月一日から、非常な大激戰と成りました。

此時敵は、優勢なる兵を以て、茨兒山附近に陣を占め、我が側背を猛射しましたので、我が右翼の島村部隊は、方向を更へて是に向ひ、午前の中に五頂山を占領しましたが、何分敵が頑強なので、それよりは進む事成らず、心成らずに此所に夜を明かしたのです。

その間に、第二師團の萃を集めた、中央縱隊の岡崎部隊は、馬場大佐を右翼に將とし、谷山大佐を左翼に將として、

太子河右岸の激戦

饅頭山

午前六時に寒屯を發し、黑英台の西北にある、饅頭山へと進撃しました。すると又敵は黑英台、水光寺の陣地から、斷えず砲彈を送りますので、容易に攻取る事が出來ず、その中に日が暗れました。

夜襲の成功

其所で岡崎部隊は、原田枝隊と力を合させて、闇に乘じて夜襲と定め、敵前五十米突まで進んで、一齊に火蓋を切りました。

然るに敵も去る者ですから、此所取られて成るものかと、最も勇敢に防戰し、果は兩軍入り亂れて、吶喊の聲、銃劍の響、山も崩る許りでありましたが、其夜の十二時頃に成つて、遂にその饅頭山は、我軍の手に歸したのであります。元より此所は敵に取つて、最も大切な所ですから、

名譽の岡崎山

一旦我手に渡しましたが、何でも取り返へさねば成らぬと、二日の午前十時頃には、猛烈なる砲撃を初め、我が守備兵の頭の上から、榴散彈、曳火彈を、雨霰と浴せ掛けましたので、その爲めに我死傷は、見る〳〵中に數を增して、目も當てられぬ有樣に成りました。

第六章　名譽の岡崎山

此時隊長馬場大佐は、三面から猛烈な砲撃を受けながら、泰然として少しも動かず、よく部下を勵ましましたので、士卒も亦勇を鼓して、骨に成つても此所は退くまいと、一生懸命に守りましたが、その中に夜に入りますと、果して敵は逆襲して來ました。

谷山枝隊

で、その初は谷山枝隊に向つて、一度ならず二度までも、勢鋭く攻め掛りましたが、凡そ二時間許り奮闘して、一とまづこれを退けますと、今度はまた馬場隊に押し寄せ、此所も亦追拂はれました。所が第四回目には、非常に猛烈な勢で、また馬場隊に向ひましたから、此方も必死の力を出して、これに向つて奮闘し、辛くも追拂つてしまつたのであります。

第五回の逆襲

すると敵はこれにも懲りず、翌三日の午前二時には、更に第五回の逆襲を試みました。而も今度は兵力を増し、中佐自ら先に立て、喇叭を吹き、太鼓を叩き、鬨の聲をどつと揚げて、勢激しく攻め登つて來ましたから、我軍は皆山上へ出て、さながら夕立の降る如く、一度に射撃を食らせましたが、それでも屈せぬ敵兵は、屍を踏み越え、乗り越えながら、我陣近く進んで來るのです。

其所で此方も射撃を止め、『前へ』の號令諸共に、潮の様な敵の中へ、面も振らず割つて入り、縦横無盡に突き立て、斬り立て、彼の摩天嶺の時にも劣らぬ、凄ましい白兵戦と成り、敵も味方も之が爲めに、非常な損害を受けましたが、やがて敵も疲れたと見えて、一旦引揚げてしまひました。

摩天嶺以來の白兵戦

其中に夜が明けますと、敵も昨夜の五回の逆襲に、大いにその兵力を費やし、且つは我兵の勇猛なのに、よく〳〵驚いたと見えまして、遂にこの陣地を引揚げましたから、是に於て饅頭山は、全く我が軍の有と成りました。此時からして此山を、更に岡崎山と云ふのであります。

千古の紀念

寡兵を以て大敵を引受け、前後五回に及ぶ逆襲を、毫も屈せず追拂つて、遂に占領を確實にした、岡崎部隊の戰功は、實に千古に絶したと云ふべく、その名を以て此山に冠らせ、永く名譽の紀念とするのも、決して無理ならぬ事であります。

左縱隊の近衞師團

さて岡崎部隊は、かくして此山を占領しましたが、見渡せばその前面には、已に野津軍奥軍に破られて、此所まで逃げて來た敵の大軍が、雲霞の如く見えますのを、まだ進んで擊つ事が出來ません。

所へ左縱隊の近衞師團は、九月四日を以て到着しました。一體この左縱隊は、野津大將の中央軍と、相提携して働いて居ましたので、その爲めかう後れましたが、その代り右縱隊や中央縱隊の樣に、嶮しい山道を來ませんでしたから、野砲も十分に持つて居ますので、先きに此所に居た二個の縱隊も、此の到着に非常の力を得、卽ち此隊を總豫備隊として、右縱隊と中央縱隊とは、直ちに前面の敵に向ひ、大攻擊を行ふ事に成りました。

激烈なる追擊戰

英城子

三道覇子

立林溝

第七章　激烈なる追擊戰

大攻擊の命を受けますと、右縱隊は英城子に、中央縱隊は三道覇子に進む事に成り、午後十時と覺しき頃、暗を衝いて出發しましたが、此時已に木越部隊は、立林溝まで進んで居ました。

又島村部隊は、同じく十時に陣地を立ち、その今村枝隊

激烈なる追撃戰

小道嶺

暗夜の混戰

は、また小道嶺を占領し、進んで大道嶺に向はうとします と、右翼に向つた相原枝隊の方で、盛んに銃聲が聞えますから、急いでこれへ援兵に行きますと、忽然としてその左側から、敵の一齊射撃をうけました。

それで此方からも突撃し、難無くこれを撃退しましたが何しろ暗夜の事ですから、敵は退路を誤つて、我が後方の輜重隊に向ひ、頻りに銃火を送りましたので、元より戰闘力の無い輜重隊は、此爲めに一時に亂れますと、是を聞いた島村少將は、自ら馬を陣頭に進めて、士卒を勵まし闘ひます中に、敵も味方も暗に紛れて、勝たか敗けたか解らなく成つたのです。

其中に夜が更けて、月が漸く昇りました所で、初めて氣が付いて見ますと、我が左側には敵が在り、敵はまた其背後に、我軍の在るのに驚きましたが、果は雙方相迫つて、又もや此所に入り亂れ、激しく奮闘する事に成りました。

けれども一度破れた敵は、長く踏み耐へる事が出來ず、遂に全隊が足元を亂たして、一散に逃け出しましたから、我軍はすかさずこれを追つて、息も次がせず攻め立て攻め立て、とう〳〵四日の夜半頃には、遼陽の城廓まで迫つて來、翌五日には、めで度く遼陽に乘込ました。

尤も敵軍は、此間からの接戰に、段々守を奪はれましたので、とても敵はぬと思ひましたか、已に九月二日を以て、退却の準備を初め、まづ我第一軍、卽ち右翼軍の側面攻撃には、如何に猛烈な突撃を受けても、決して退く事の無い

九月四日の夜半

敵退却の準備

様にと、さてこそ兵力を十分に備へ、その間に他の兵を繰り出して、巧みに退却をしたのであります。

敵退却の巧妙

尤も敵は、折角嚴重の防禦線を張りながら、思ひの他長くは守らず、その全力を出さぬ中に、かく退却してしまひましたのは、甚だ卑怯でありますが、是と云ふのも、我が右翼の黒木軍が、勇敢無比の勢を以つて、嶮山を越え、大河を渡り、豫定通り敵の背面を掠かして、この荒肝を挫いだからであります。

それと同時に、この黒木軍と氣脈を通じて、始終豫定の戰畧を誤らず、敵の正面及び右側を擊つて、散々にこれを擊ち破つた、野津軍及び奥軍の功績も、決してこれに劣るのではありません。

第八章　野津軍の戰況

野津軍の戰況

第十師團右縱隊第五師團左縱隊八月二十六日析木城を發す

さても遼陽攻擊の中央軍は、川村中將の第十師團を右縱隊に、上田中將の第五師團を左縱隊にして、野津大將これが司令官と成り、八月二十六日を以て、析木城の司令部を發し、侯家屯附近まで進んで、鞍山店に據つて居る敵と、まづ砲火を交へました。

鞍山店

一體この鞍山店は、遼陽の前面に於ける、屈竟の防禦陣地でありますから、敵も多數の兵を集め、此所を先途と防ぎましたから、戰爭も亦激烈を極め、其爲めに桂聯隊長の戰死

桂聯隊長まで、名譽の戰死を遂げた位であります。

けれども長くは食ひ止める事出來ず、翌二十七日の午前

八卦溝
調軍臺
七嶺子
潘家爐

にはとう〳〵退却してしまひました。尤もこの鞍山店には、奥大將の左翼軍も共に向つたのでありますから、占領の後は、左翼軍に此所の守備を委かせておき、野津軍は直ちに進んで、敵兵の追撃に掛り、二十八日の午前には、八卦溝から調軍臺まで、敵を追詰めて來ましたが、此時左縱隊は、始終東淸鐵道の線路により、また右縱隊は、それより東の高地を越えて、七嶺子まで進んだのであります。

すると敵は、我が攻撃の猛烈なるに堪へず、亂れに亂れて敗走し、遼陽から三里手前の、潘家爐まで來ますと、此所の守備兵と一所に成つて、又我軍に抵抗しましたのを、又もや手強く攻め立てゝ、やがて此所をも占領しました。けれども地形が悪く、味方の進撃する所が、敵の前に露出に成るために、始終雨の樣に彈丸を被つて、其爲めに我が損害も、決して少くは無かつたのです。

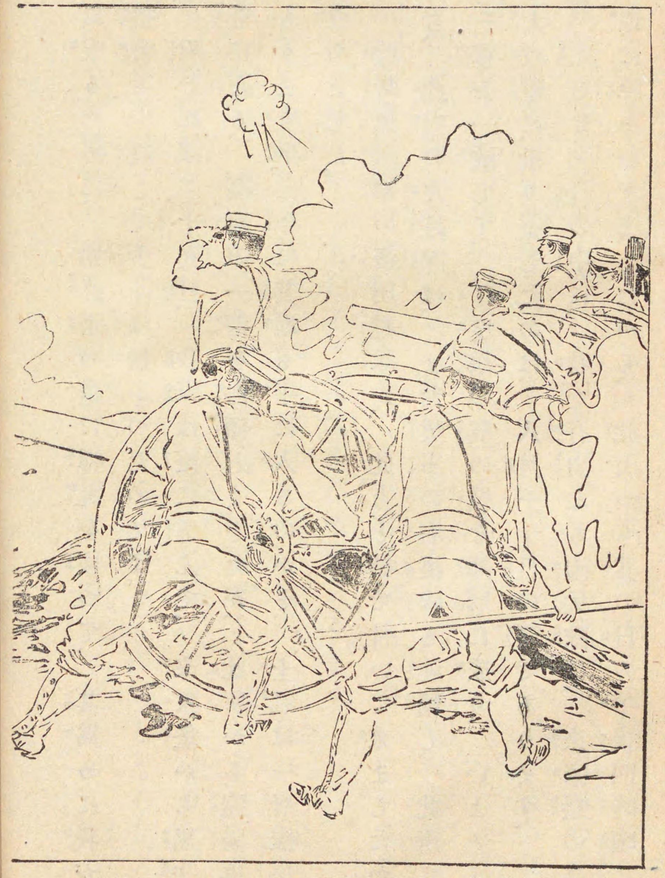
來家堡
黑牛莊
淺田縱隊

明くれば二十九日、我軍は更に進んで、來家堡から黑牛莊に亙る、高地の一帶を占領しましたが、此所から遼陽はもう二里半。今に其地も手に入るのかと、士氣は一層振ひ立ちました。

此時黑木軍の淺田縱隊が、此方と結で付いて來ましたから、此方の左縱隊は、また奥軍の右縱隊と連繫し、此所に三軍が一致して、丁度鶴の翼の樣な陣形に成り、いよ〳〵大攻撃に掛りましたのは、八月三十日の事であります。

尤も廿九日の中に、我が有力なる砲兵隊は、來家堡の高地に陣を敷きましたから、此所から其の日の午後四時頃に

敵陣の輕氣球



野津軍の戰況

第八章

野津軍の戰況

敵の軍用輕氣球

は、前面の敵陣を目かげて、轟然と一發喰らはせましたが、是ぞ遼陽攻撃の、幕明の合圖と云ふものでありました。

されば又敵からも、負けぬ氣に成つて應砲し、次第にこの勢を增して、果は非常の激戰に成り、雙方から撃ち出す彈丸は、天に響き地に轟いで、凄ましい有樣に成りました。

折から大きな紙鳶の樣な物が、敵の陣から飄然と揚りましたが、是こそ軍用輕氣球なるもので、敵はかうして我が陣地の樣子を、上から見おろさうと云ふのです。

憎き敵の振舞よと、我軍からまたその輕氣球を狙つて、頻りに彈丸を飛ばせましたが、何分高い空に在るので、思ふ樣には撃てません。

所がこの輕氣球が下りると、敵の照準が初めて確かに成りましたので、此方も決して油斷無く、頻りに是と戰ひましたが、その中に日も暮れかゝりましたから、一とまづ砲戰を見合はせました。

シャオヤンズヰ附近

早飯屯

明くれば卽ち三十日。三軍一致の力を持つて、遼陽の大敵に當るの日であります。

我中央軍は、夜の明けぬ中から行動を初め、シヤオヤンズ井附近の高地まで進んで、方家屯、新立屯等に據る敵と、相對して陣を構へました。

見ると敵は、昨日の戰に鑑みまして、約百門の砲を並べ、其上遼陽の本部から、新たに大勢の援軍を寄せて、此所に大決戰をしやうと云ふ意氣組です。

其所で我が右縱隊の一部は、まづ早飯屯の高地の敵を、

我が連絡破る

再び連絡す

一度に擊破つて進まうとしますと、敵の後の方に居た大部隊は、其陣地を取り返さうと、非常な勢で押し寄せて來ましたが、其勢凡そ二個師團餘り。右縱隊を押し包んで、無二無三に攻め立てますので、その爲めに我隊は、淺田縱隊との連絡を失ひ、容易ならぬ苦境に陷りました。

けれども將卒の勇猛なる、一步も此所を退かず、奮戰力鬪を極めましたが、其効あつて午後三時頃には、淺田縱隊と連絡する事が出來、力を合はせて敵に當りましたから、玆に戰爭は增々激しく、何時果てるとも知れませんでしたが、日はその間に傾いて、終に此日は此戰場に、夜を明かすと云ふ事に成りました。

されば三十一日も、昨日と同し陣形で、午前六時から砲

櫻桃園の重砲隊

新立屯方家屯

擊を初め、その砲煙の下を潛つて、步兵は頻りに進擊を試みましたが、何分敵の防禦地が堅固で、容易に拔く事が出來ないのです。

所へ駈けつけて來ましたのは、重砲兵の一隊で、新たに左翼軍から此方へ廻はり、櫻桃園の東北の、谷の間に砲列を敷き、新立屯、方家屯、シヤオヤンズヰの敵陣を狙つて、勢鋭く擊ち初めましたが、是には敵の砲火も、稍痿んで見えましたから、其機を外づさず我隊は、シヤオヤンズヰの砲壘に向つて、頻りに進擊を試みましたが、此時もまだ捗しい勝利は無く、やがて此日も暮れてしまつたのです。

其中に左翼の奥軍は、三十一日の夜半から、砲兵の全力を擧げて、猛烈に前面の敵を射擊し、次いで總强襲に移つ

敵砲壘の必死の防禦

野津軍の戰況

第八章

遼陽の關門を破る

東西八里莊

て、九月一日の夜明迄に、新立屯の西の高地を初め、首山堡西方の高地まで占領し、漸く遼陽の關門を破りましたから、中央軍も此機に乘じて、退却する敵を追擊し、タテブチフから東西八里莊を占め、直ちに遼陽の城廓に迫りました。

然るに敵は、又もや城外の堡壘に據つて、我が軍を食ひ止めましたが、此堡壘には敵も全力を注いだと見えて、今までに無い堅固な上に、必死に成つて防ぐのですから、我軍もこの攻擊には、大分骨が折れたのであります。

で、一日、二日、三日と、手強く攻め立てたのでありますが、まだ敵は退きませんから、此上は損害を顧みず、斷然大突擊を行つて、此城廓を破る事に定め、遂に午後六時を以つて、猛烈に敵の砲火を侵し、堅固な防禦物を乘り越え、どつと許りに突擊しましたが、やがて右縱隊は南門から、左縱隊は北面から、遂に遼陽城に攻め入つて、一度に帝國萬歲を唱へましたのは、實に九月三日の夜半でありました。

九月三日の夜半

奧軍の活動

八月二十六日出發

第四師團左縱隊
第六師團中央縱隊
第三師團右縱隊

第九章　奧軍の活動

茲にまた左翼軍は、奧大將の指揮の下に、同じく八月二十六日を以て、大飛躍を初めました。

小川中將の左縱隊は、二臺子、三臺子の牛莊街道から、大久保中將の右縱隊は、烟臺、甘泉堡の遼陽街道から、大島中將（義昌）の中央縱隊は、三里橋、石頓山子を經て、寶石山子の方面に向つて、肅々と歩を進め、まづ敵の要害と賴む、

鞍山店の大敵

奥軍の活動

鞍山店の敵を掃ひに掛つたのです。

然るに此陣地の敵は、此前野津軍に攻められて、大分弱つて居る所でしたから、この奥軍の進撃を見ると、一支へも試みず、後の方へと退却しましたから、難無く此所を占領しました。

一體此の鞍山店には、大部隊の敵が據つて居ましたので、さてこそ奥軍も、初めにその全力を擧げて向ひ、此所で大戰爭を行る心算でありましたのに、思の外早く逃げましたので、少しは張合が拔けたのです。

けれども留まる所ではありませんから、凡そ四里ほど前にある、沙河をさして前進し、二十七、八日の二日とも、專ら敵を追擊しながら、陣地を進めて行つたのであります。

新家三臺子

白旗堡

此時中央の大久保縱隊は、二十八日の正午前に、新家三臺子から、揚起堡に亘る一線を奪ひ、砲八門を鹵獲した位。それと同時に右縱隊も、八卦溝の敵と猛烈に戰つた後、これを擊退してしまひましたが、左縱隊の方面ばかりは、別に敵の抵抗も無く、白旗堡の北まで進み、此所で三隊とも相竝んで、沙河の邊に陣取る事に成りました。

敵はと見れば、沙河の北二里許りの、首山堡の高地を初め、シヤオヤンズ牛、新立屯、方家屯、黑牛莊の村落に連なる一帶の高地に據つて、頗る堅固な要害を構へ、我が前進を遮ろうとして居ります。

此を見て我軍は、二十九日一日を、此陣地に留りまして、隊伍を整へ、部署を定め、いよ〳〵明日は一擧して、この

首山堡の苦戰
駐蹕山

大敵を撃ち破るぞと、上は司令官、師團長から、下は下士、兵卒に至るまで、元氣天を衝くばかりであります。

第十章　首山堡の苦戰

抑も首山堡と云ふ山は、昔唐の太宗の、行在所であつたと云ふので、別に駐蹕山とも呼ばれる名所ですが、三方に平野を控へ、頂上には煉瓦造の展望臺も出來て居る、一際聳えた高地でありますから、此所を味方に奪つてしまへば、非常な利益がありますが、その代り敵に據られて居る間は、味方の前進が思ふ樣に出來ません。

さればこそ我が軍は、右と中央の二個縱隊を以て、極力これを攻める事に成りましたが、その初めは例の砲戰で、

夜襲
マエトーレ
孤家子
敵の機關砲の猛烈

盛んに彈丸を浴せかけましたが、先方も頻りに砲彈を降らせて、容易に動く色もありません。

此に於て我が中央縱隊は、いよ〳〵夜襲と決心し、三十一日の午前一時、その右翼はマエトーレから、首山堡の南の麓から登り、左翼は孤家子の方面から、直ちに敵壘に迫る事に定め、やがて敵の防禦物に近づいて、地雷火の線を切り、鐵條網を破りにかゝりますと、敵は此物音を聞き付け、一分間に六百發出ると云ふ、鋭利な機關砲の火蓋を切りましたので、此爲めに我軍は、面を向ける事さへ出來ず、見る〳〵中に味方の死骸は、此所や彼所に山を築きました。

かう云ふ風で一歩も進めませんから、餘義無く敵と睨み合の儘で、一夜を明かす事に成りましたが、元より戰場の

左縦隊の應援

小川師團長の負傷

江口聯隊長、加藤、平山、竹内三大隊長負傷

事ですから、飯も食へねば、水も飲めず、その苦辛は一通りでありません。

然るに敵は、更に我が左翼隊の左に廻つて、孤家子の北西に出やうとする様子ですから、是では成らぬと云ふので、左縦隊の小川師團は、道を轉じて應援に來ましたが、首山堡から發射する敵彈は、此へも夥しく降り掛つて、その爲に小川師團長は、野口參謀長と共に、彈片に中つて傷を受けました。それは三十一日の、午後三時頃であります。

此の有様でありますから、中央縦隊の苦戦の程は、殆んどその度を極めまして、聯隊長江口(昌條)を初め、加藤(錬太郎)平山(信夫)竹内(方山)の三大隊長も、それ〳〵皆傷いて、遂には大尉が聯隊長に代つて、全隊を指揮したと云ふ位です

悲慘なる關谷聯隊

第三師團

第三十四聯隊

橘少佐

から、その激しさ凄ましさ、思ひ遣られるではありませんか。

第十一章　悲慘なる關谷聯隊

苦戦は中央縦隊に止まりません。同時に首山堡の東南の高地、シヤオヤンズヰから攻め掛けた、右縦隊の第三師團も、非常な困難を極めましたが、中にも關谷大佐(銘次郎)の率ゐた、靜岡第三十四聯隊の如きは、實に悲慘を極めたのであります。

此關谷聯隊には、彼の廣瀬中佐に對して、陸軍の軍神とまで敬められた、橘少佐(周太)も居りましたので、少佐は大隊長として眞先に進み、關谷聯隊長はこれに續いて、軍刀

首山堡の苦戰

悲慘なる闘谷聯隊

第十一章

聯隊長の傍僅八名

悲慘なる關谷聯隊

關谷大佐の戰死

を打ち振り、〳〵、頻りに突貫の命を下だしますと、敵は我が聯隊旗を目ざして、重砲彈をばら〳〵喰はせ、その下を潜つて猛進すれば、今度は小銃の彈を亂射して、面を上げる事も出來ない位。その爲めに我軍は、夥しい死傷を出し、聯隊長の邊に在るもの、僅か二十名位に成りましたが、それにも屈せず進みます中に、また敵彈に斃されて、果はたつた八人に成つたのです。

此時關谷大佐は、旗手の中山少尉を顧みて、『今は余は死を決したから、君はその聯隊旗を守つて、急いで他の隊へ行つて、我が聯隊の名譽を全うしてくれ！』と、思ひ入つた言葉を殘し、猶も進んで鬪ひます中に、とう〳〵戰死を遂げてしまひました。

三方より敵彈を受く

是より先橘少佐は、狼牢、鐵條網などの防禦物を踏み越え、機關砲亂射の下を潜り脫け、纍地に突貫して、山上の敵を擊退し、日章旗を其所に樹てましたのは、まだ八月三十日の、旭も昇らぬ中であつたのです。

然るに敵はこれを見ると、東は新立屯、西は首山堡、北は方家屯と、三方から砲彈を浴びせかけましたから、心は鐵の如くでも、身は元より石ではありませんから、見る見る中に味方の兵は、算を亂して斃れました。

するとまた此機に乘じて、一旦退げた敵兵が、また逆襲して來ましたので、此所でまた白兵戰に成り、少佐自ら軍刀を揮つて、群がる敵に割つて入り、瞬く中に三四人を、見事に斬つて棄てました。けれども先刻からの砲擊の爲め

悲慘なる關谷聯隊

橘少佐の最期

に、重傷を數ケ所に帶びて居ますので、今は是までと覺悟をして、其場に切腹しやうとしたのを、部下の者に助けられ、漸う山の下まで退きましたが、遂に此所で事切れてしまひました。

かう云ふ風で、この首山堡の攻撃は、我が勇猛なる第二軍にも、思ひの外面倒であつたのです。

そこで午後六時半頃には、我が各縱隊の砲兵が、又一齊に砲口を揃へて、首山堡とシヤオヤンズヰの高地を目がけ、地軸も碎けよと云ふ勢で、猛烈に彈丸を喰はせましたが、それでもまだ敵は動かず、果は此日も苦戰の儘で、また暮れてしまふ事に成りました。

が、此時はもう敵も味方も、近い所は五十米突まで接近

九月一日大夜襲の成功

激戰五十時間

して、互ひに一歩も退かず、隙を覗つて居りましたが、其中に機も熟したと見えまして、九月一日の午前一時、大夜襲の命は下だりました。

然るに今度の大夜襲は、果して効を奏しまして、午前二時半までの突撃に、頑固の敵も力弱つて、とう〳〵後を見せましたから、是を蹴散らし、突落して、九十九米突の高地と云ふ、首山堡の絶頂に、日章旗を押し立てゝ、どつと勝閧を揚げましたのは、何と云ふ愉快な事でありましたらう。

思へばこの首山堡は、三十日の夜明から、九月一日の夜明まで、殆んど五十時間に亘る大激戰で、漸く占領したのであります。

遼陽城の日章旗

遼陽城の日章旗

大趙家臺

尤家莊子

第十二章　遼陽城の日章旗

頑固なる首山堡の敵は、我が百折不撓の勇氣に依て、遂に首尾よく追拂ひ、遼陽の關門なる要害の地は、斯くして我が軍の手に歸しました。

其所で我軍は、此の陣地を占めますと、まづ一時兵力を養ひ、更に九月二日を以つて、三軍互ひに連絡を取りつゝいよ〳〵遼陽の總攻撃に掛りましたが、此時左翼軍は、右縱隊を八里莊から、左縱隊を大趙家臺から、又中央縱隊は、鐵道線路を夾んで、西八里莊、尤家莊子から進めて、遼陽城へと迫つたのであります。

けれども此日は、只遠方から砲彈のみを交換して、激い

九月三日總攻撃

四日の午前

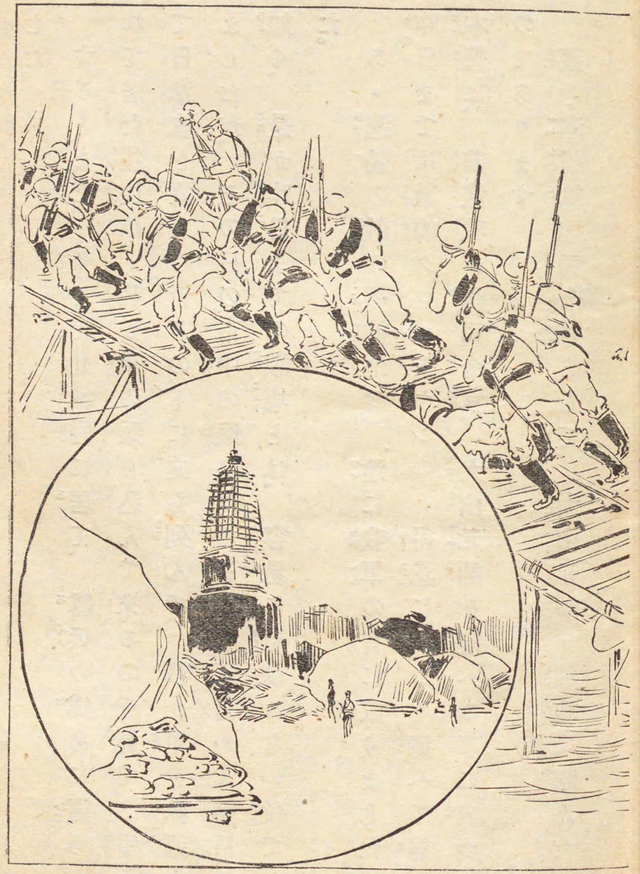
戰爭にも成りませんでしたが、その砲の中には、此間中の接戰で、敵から鹵獲した重砲を、その儘味方の用にして、敵を大いに窘めたのは、小氣味の好い話ではありました。

明くれば九月三日、午前十一時と云ふのを合圖に、いよいよ歩兵の全力を擧げて、總攻撃に掛りますと、敵も流石に城廓に據り、またその前の防禦物を力に、一時は抵抗を試みましたが、元より長くは支へ得ません。やがて停車場に火を放ち、これに紛れて退却を初めましたから、此方はさらに勝に乘つて、逃げる敵は砲彈で撃ち斃し、殘る敵は銃劍で突き伏せ、息も次がせず追撃し、遂に四日の午前には、天地に輝く日章旗を、遼陽城の一角に押し立て、是と同時に三軍が、三方から練り込んで、一度に萬歳を唱へま

遼陽の占領

遼陽城の日章旗

第十二章



遼陽城の日章旗

した。

市民大歓迎

すると又、今まで此城内に居て、露兵の爲めに窘められて居た住民は、我が軍の乘り込んで來るのを見て、爭うて日章旗を立て、皆その下に立ち列んで、我が軍を歡迎しましたが、その日の市中の賑ひは、まるで正月か大祭日の如く、是が昨日までの戰場とは、容易に思はれない位でした。

大山元帥

あゝ遼陽の敵の根據地は、遂に我軍の有に成りました。昨日までは敵帥クロバトキンの、得意に成つて搆へて居た本營は、其儘我が總司令官、大山元帥を迎へる事に成つたのであります。

蓋し滿州軍總司令官として、大山元帥が戰地に臨んだの

總司令官出陣以來の大戰

は、過ぐる八月の事でありましたが、此の遼陽の大攻擊は、總司令官出陣以來、實に初度の大戰で、而も此通りの大勝利を得ました。是と云ふのも元帥初め、帷幕の將軍の作戰計畫が、その宜しきを得たればこそです。

梨本宮殿下

それと共に、我が帝國臣民の、決して忘れては成らぬのは、陸軍步兵大尉として、梨本宮守正王殿下の、奧軍の司令部附として、親しく此の大戰に與り賜ひ、屢々砲煙彈雨の下に、危險を冒かさせ給ふた事であります。

煙臺沙河方面

さても遼陽を追はれた敵は、此時何所へ行きましたらう？　彼等は更に北の方、奉天府さして退いたのです。されば我が黑木軍は、此時わざと遼陽に入らず、退く敵を追ひながら、煙臺から沙河の方面まで、その大部隊を進めまし

黑木軍の前進

遼陽城の日章旗

た。

次いで起るべき大戦は、是非此の邊で無ければ成りません。

六八

少年日露戰史第九編 完

梨本宮殿下の御仁德

久邇宮殿下の御弟歐洲御留學中開戰

附錄 軍國讀本 卷の九

巖谷小波編

一 梨本宮殿下の御仁德

第二軍司令部附として、常に大將の傍を離れず、入つては軍議に參與し、出でゝは實戰を觀行はせ給ふ、陸軍步兵少佐梨本宮守正王は、彼の第一軍の司令部附として、同じく御出征あらせられる、久邇宮殿下の御弟君であります。

今度の戰爭の初まる迄は、殿下は陸軍大尉として、歐羅巴に御留學あらせられましたが、開戰の事を御聞きに成ると、直ちに陛下に御奏請あつて、敕許を得させ給ふや否、

首山堡の御觀戰

士官候補生の御時代

大纛（天皇陛下の御旗）

勇み立つて御歸朝あり、長途に御疲勞さへ休ませ給はず、直ちに奥軍の司令部に附いて、戰地に臨ませられましたが、遼陽攻擊の時などは、司令官と共に親しく首山堡に登らせられ、まだ時々は流れて來る彈を、少しも心に懸け給はず、よく戰況を察し給ふ御膽力は、御附の人々も、私かに敬服して居たのであります。

今殿下の御人と成りの、如何に御仁德に富ませたまふかは、次の談話によつて、大方解るでありませう。

時は今から十年前、卽ち明治二十七八年の事であります。殿下はまだ士官候補生として、廣島の兵營に在らせられましたが、丁度其頃、大元帥陛下も、此所まで大纛を進ませられましたから、殿下は御着輦の當日、御出迎の爲め停車

巡査の麁忽

場まで成らせられました。

が、元より殿下の事ですから、親しく陛下に御對面あらせられる爲め、ツカ〳〵と停車場内までお進みに成りますと、其邊に番をして居た巡査が、殿下を普通の下士と思ひ、

『コラ〳〵其所へ入つては成らん。』

と制しましたが、殿下は御自分の事とは思召されず、其儘關はず入らうと成さいましたから、巡査は走りよつて、いきなり御肩に手をかけて、引戻さうとしたのです。

所へ一人の警部が來ましたが、これは殿下をよく知つて居ましたので、驚いて巡査を押し隔て、

『殿下ぢやぞ。無禮するな！』

と、大聲に叱りつけ、更に殿下に向ひまして、

殿下の御褒辭

『新參の巡査、殿下を存じ申さず、非常な御無禮を致しました。追て相當の處分を致しますから、何卒御勘辨を願ひまする。』

と、恐る〳〵御詫を申上げますと、殿下はニツコリ笑はせ給ひ、

『イヤ、それには及ばん。』

と、頭を振らせたまひ、更に恐縮して居る巡査に向はせられ、

『其方はよく職務を盡した。感心な奴ぢや。』

と、却つて御褒の御言葉を賜はりました。

また戰地に在らせられた時、何と云ふ彈みでありましたか、殿下は手袋を失はさせられました。傍に居りました某將校は、御痛はしき事に思ひ、自分の用ひて居りましたのを取つて、

『恐れながらこれを御使ひ下だされませんか！』。

と、殿下に捧げましたが、

『志は有難いが、それでは其方が困るであらう。』

と、容易に取り上げたまはず、再三御勸め申してから、初めて御取り上げに成つたと云ふ事です。

二　負傷したる小川中將

遼陽の大決戰には、我軍の死傷の數、殆んど一萬二三千に達しましたが、その中最も上級の將軍として、此の名譽なる勇士の中に、第一に指を屈せられるのは、彼の第四師

小倉藩士

團長、中將男爵小川又次でありました。

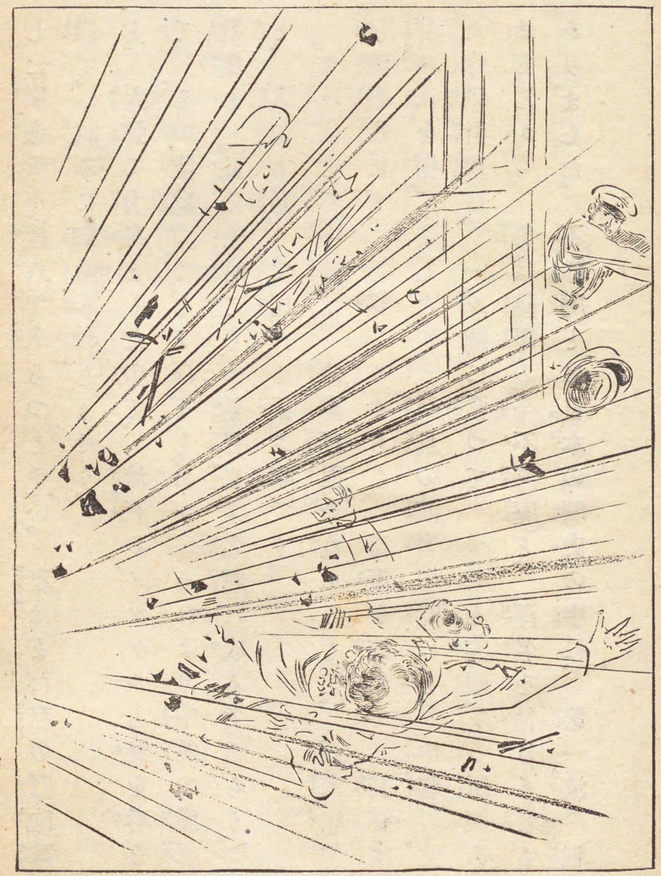
陸軍教官メッケル將軍

中將は奥司令官と同しく、豐前小倉の藩士であります。少年の頃から江戸へ來て、有名な洋式の兵術家、江川太郎左衛門の教を受け、熱心に勉強しましたが、その効空しからず、今は我が陸軍に於ける、第一流の戰術家となつて、世界に名を轟かすに至りました。

山砲と野砲の優劣

獨逸で名高い戰術家の、メツケルと云ふ人が、嘗て陸軍の教官と成つて、日本に來て居りました時分の事です、中將はまだ尉官で、メツケルの講義を聞いて居りましたが、山砲と野砲の使ひ方で、教官の話に伏せず、大いに議論をしましたが、元より負けぬ氣の中將は、やがて立ち上つて、『それほど貴君が云ふならば、速に歸國して、山砲に熟練

小川中將の危難



負傷したる小川中將

メッケルの敬服

今不識庵

した獨逸兵を連れて入らつしやい。私はまた私の野砲隊を以て、試みに御敵手致しませう。』

と、大聲で力身ましたので、流石のメッケルも氣を呑まれて、その儘默つてしまひましたが、それより中將の膽略に敬服し、『此の士官こそ、他日必ず名將に成るであらう。』と、人にも話して居たと云ふ事です。

さればこそ中將は、臺灣征討を初めとして、西南戰爭、日清戰役にも、智謀をめぐらし、奇策を施して、其都度拔群の功を樹てましたが、苟且の演習の時にも、中將の立てた作戰計畫は、一々圖に當つて、少しも非難する所がありませんから、果は陸軍の「今不識庵」と、渾名を付ける者さへありました。不識庵とは日本の歷史の中に、第一流の戰術

爲朝の末孫

學者將軍

家と謠はれる。彼の上杉謙信の事であります。

中將はまた爲朝の末孫だと云ふ事で、その腕力の強さは、實に當時の鎭西八郎を思はせる位。音聲も亦破鐘の如く、一度三軍を叱咤する時は、鬼神も耳を掩うて逃げる許りです。

されば首山堡の應援の時、敵彈にその司令部を擊たれ、頭部に重傷を受けましたけれども、擔架を退けて尙兵を指揮し、やがて戰爭が終つた後、初めて衞生隊に助けられて、その介抱を受けたと云ふ事です。

三　學者將軍

九州の各師團の中でも、最も勇猛と評判のある、熊本の

大久保春野

第六師團は、陸軍中將大久保春野の率ゐる所で、遼陽の大決戰には、第二軍の中央縱隊として、首山堡の强敵を破り、偉大の功を樹てました。

中將は軍人の中でも、稀に見る所の學者であります。隨つてその戰略の如きも、新式の兵學を應用して、常に好果を得て居りましたが、而も膽大に、氣壯に、智勇兼備の名將とは、かく云ふ人を云ふのでせう。

屋上の觀戰

されば首山堡の攻擊の時など、銃丸は雨の如く、砲彈は霰の如く、猛烈に陣地へ降つて來る中を、中將は事ともせず、一段高い百姓家の、屋根の上に自ら登つて、副官を傍に從へ、悠々と雙眼鏡をかざして、戰況を仔細に見て居りました。この大膽な擧動を見て、部下の士氣の振ひ立つのも、元より當然の事であります。

さてこの智勇を兼ねた名將は、何所の人でありましたらうか？　陸海の軍人は、多く九州から出て居りますが、中將はそれに反して、東海道は遠江の、見附と云ふ所から出ました。

遠州の神官

その家は神官でありましたが、王政維新の頃、中將は尙青年の身を以つて、進んで勤王黨に投じ、當時の官軍の參謀、西鄕隆盛に賴んで、其部下に附けて貰うとしました。

西鄕隆盛に從ふ

所が隆盛は、まづ中將に命じて、官軍の先鋒板垣退助と、幕府の大久保勇とが、『今武藏の笹尾峠で戰つて居るから、その樣子を見屆けて來い』と云ひました。これは中將の膽力を、まづ試さうと思つたからです。

大久保中將の剛膽

豪傑豪傑を知る

佛國留學

然るに中將は、隆盛の命をうけて、直ぐに戰場へ飛んで行き、戰況を委しく見て、歸つてこれを語りましたから、隆盛もその勇氣を愛し、直ぐに中將の志望通り、自分の部下として引立てました。是が大久保中將の、後に立派な軍人に成る、出世の端緒でありますが、豪傑は豪傑を知り、偉人は偉人を見るとは、實に此事を云ふのであります。

その中に維新の亂も治まりますと、根が學問好の中將は、橫濱へ行つて語學を研究し、後に佛蘭西に留學して、兵學を修める事數年、歸朝して陸軍部内に入り、それから次第に經昇つて、遂に今日の名譽を得たのであります。

明治二十八年、臺灣の土匪を征討に行つた時の事です。或日中將は幕僚と一所に、軍議を凝して居りますと、何時

自から士匪を斬る

の間に忍び寄りましたか、士匪の一人が木の陰から、青龍刀を以て斬りつけましたが、中將ははやくも體をかはして、

『おのれ猪狐才な！』

と云ひながら、軍刀の鞘を拂ふ手も見せず、其奴を斬つて伏せましたが、その行動の敏捷さには、居合はせた幕僚も、皆舌を捲いたと云ふ事です。

初度の戰爭

斯程の名將でありましたが、十年の西南の役にも、二十七八年の日清戰爭にも、如何云ふものか戰場に現はれず、親しく三軍を指揮して、砲煙彈雨の間を往來したのは、今度が初度なのであります。

その代り、教育總監部參謀長、戸山學校長、士官學校長などは、中將の久しく執つて居た職務です。是を以て見ても、陸軍部内の學者と云はれること、決して無理ではありません。

名譽聯隊の名譽勇士

福知山第二十聯隊　桂大佐

四　名譽聯隊の名譽勇士

遼陽前面の攻撃に、聯隊長以下の將校を失ひ、而も敵壘を乘取つて、名譽聯隊の稱號を得たのは、野津の中央軍に屬して居た、福知山の第二十聯隊であります。

此の隊は、大佐桂眞澄が率ひて居ましたが、已に二十六日の事、白石塞の戰鬪で、大佐は森大隊長と共に、名譽の戰死を遂げますと、續いて佐藤大隊長、新納大隊長心得も斃れ、また遼陽の總攻撃に當つて、新聯隊長八木下中佐は、重傷を受けて、戰場を退き、代つて指揮をした今井少佐も

江上少佐（喜三郎）和歌山藩士

同じく負傷してしまひました。

恰も此時、其身大尉でありながら、遂に進んで聯隊の指揮を執り、獅子の暴れたる勢を以て、軍刀を眞前に振り立てながら、敵陣に突撃し、見事これを占領して、稀有の大功を奏したのは、卽ちその大功を以て、其場で少佐に上げられた、江上喜三郎と云ふ人であります。

少佐は和歌山の藩士で、明治二十二年少尉に任ぜられ、日清戰役に出て中尉に昇り、三十二年大尉と成つて、其時から福知山聯隊附と成りました。

斯程の勇士でありながら、平生は至つて溫和な質で、滑稽諧謔を好みましたが、その間に德を備へて居るので、此人の仲裁に會つては、如何に激しい喧嘩口論も、直ぐに交情が直つてしまふのです。

被服委員

又少佐は、今度出征する前まで、凡そ三年間と云のもの、被服委員を勤めて居りました。被服委員とは、下士卒に與へる軍帽や軍服、其他の用品を扱ふ役なので、絲や針の細い事にまで、常に注意しなければ成りません。

然るに少佐は、一寸見ると至つて暢氣で、萬事放任の樣に見えますので、上官の中には眉を顰めて、『彼の男にそんな面倒な仕事が出來るか？』と、私かに危ぶんで居た者もありましたが、さていよ〳〵行らせて見ますと、その面倒な仕事をば、さながら刃物で麻を切る樣に、立派に行つてのけましたのには、初め侮つて居る人々も、遂に少佐の敏腕に、全く敬服したと云ふ事です。

此の通り、平素は暢氣の樣でも、職務に對しては責任を重んじて、細い處まで落度無く計らひ、また常は溫厚で、蟲も殺さぬ樣に見えながら、一旦敵の前へ出ると、鬼をも挫く勇力を揮つて、拔群の功勳を顯はすとは、何と云ふ豪い人でありませう？實に江上少佐の如きは、彼の名譽聯隊中の、名譽の勇士と云ふべきであります。

五　陸軍の軍神

福知山の第二十聯隊と比べて、共に名譽聯隊の美名を受け、偉功を永く沒し難いのは、首山堡攻撃の苦戰に當つて、同しく聯隊長、大隊長を失つた、靜岡の第三十四聯隊でありませう。

中にも聯隊の花と謠はれ、否、陸軍の軍神とまで崇められて、彼の廣瀨中佐と共に、帝國軍神の模範と稱へられたのは、大隊長橘周太であります。

初め橘は、第二軍の管理部長として、鹽太澳の上陸以來、大石橋の占領に至るまで、一度も戰線には、出ませんでした。

管理部とは、上陸の時の指圖やら、行軍の際の宿舍の事やら、糧食の事やら、運搬の事やら、凡そ戰場に於ける種種の任務を、一切處理する所なので、司令部を家の主とすれば、管理部はその妻と云ふ役廻りです。さればこの長たる者は、其身戰線にこそ出でざれ、その任務の重い事は、決して戰鬪員に讓りません。

管理部の苦心

自ら望んで戰線に立つ

然るに橘部長は、よくこの重任を引受けて、毫も脫目無く事を運ばせ、軍の前進戰鬪に、少しも不便を與へなかつた丈でも、その人物の如何に忠實に、如何に勉強なるかゞ解りませう。

所が中佐は、いよ〳〵遼陽の攻撃と成つて、管理部から聯隊に轉じ、關谷大佐の下に大隊長として、初めて戰線に立つ事に成りましたのは、元より自分から望んだ所でした。

されば首山堡の攻撃は、中佐が今度の從軍の、云はゞ初陣でありましたが、元より忠勇無二の丈夫、見る〳〵中に敵を蹴破つて、はやくもその陣地を奪ひ、此處に日章旗を立てました。

所が敵は、程も無く逆襲を試み、此陣地を取り返へしに

三方から砲彈

自ら三四人を斬る

五個の銃瘡

皇太子殿下の御誕辰

來ましたから、何を小癪なと奮ひ立つて、これを擊退に掛りましたが、何分敵は步兵ばかりで無く、三方から砲彈を放つて、中佐の隊を窘めますので、部下の斃るゝ者數を知らず、果は中佐の身の中にも、前後五個の銃丸を受けたのです。

けれども中佐は少しも屈せず、軍刀を打ち揮り〳〵、敵を三四人まで斬つて倒しましたが、その中に右の手を擊たれ、やがてまた砲彈の爲めに、その臀部を擊ち貫かれて、流石の勇士も、今は進退の自由を失ひました。

此時中佐は天を拜し、

『今日は八月三十一日！　皇太子殿下の御誕辰では無いか。この御芽出度き日に、部下をかくまで傷けたのは、何とも申譯の無い次第ぢや。』

と、云ひなから軍刀を取り直して、已に割腹しやうとしましたのを、傍に居た軍曹の內田清一と云ふ者が、急いで止めて抱き起し、漸く谷間まで連れて來ましたが、中佐は遂に起たれぬを知り、

『あゝ、殿下の御誕生日！　殿下の御誕生日！……』

と、云ひ續けながら、その儘目を瞑つてしまつたのです。

あゝ、殿下の御誕生日！　是を中佐が云ひ續けながら、遂に名譽の戰死を遂げたのは、抑も何の故でありませう？

中佐はその謹嚴なる事と、忠誠なる事とに依て、嘗て皇太子殿下の御側に召し出され、奉侍する事五年間、太く殿下の御寵愛を受けて、少からぬ拜領物もあつた位です。

忠君愛國の熱誠
長崎の人
勇烈なる喇叭卒
石原聯隊

されは最期のその際までも、殿下の事を忘れる事出來ず、これを口に洩らしたのでありませう。その忠君の念厚く、愛國の情に深い事、此一語にも知られます。あゝこの壯烈な最期を聞いて、誰が腸を絞らずに居られませうか！　この忠魂は長く留まつて、國守の干城と成らん事、元より云ふまでもありません。

中佐は長崎縣南高來郡千々石村の人！　彼の廣瀨中佐の如く、矢張り九州の産でありました。

六　勇烈なる喇叭卒

第二軍の右縱隊として、首山堡東南から向つた、石原大佐（應恒）の第十八聯隊も、少からぬ苦戰をしました。

その戰の眞最中、ヒユーと鳴つて來る砲彈か、大佐の號令を掛けて居る眼前で、轟然として破裂しますと、その彈片に中てられて、大佐の側に居た者は、村山副官を初め、大方斃れてしまひましたが、武運強き大佐のみは、身に微傷だも受けませんでした。

で、大佐は、部下の士氣を皷舞する爲め、突擊を決行しやうと思ひ、わざと軍刀を揮り立てゝ、

『喇叭卒！　喇叭卒！　突擊喇叭』！

と、鋭く叫びましたが、まだその喇叭が鳴りません。更に聲を張りあげて、

『喇叭手は居らんかー　喇叭手は居らんか！』

と、呼びますと、今まで大佐の後方に、左右の腿と手とを

勇烈なる喇叭卒

撃たれて、殆んど絶息して居た一人の喇叭手は、ムク〳〵と起き上つて、死んでも放すまいと握りつめて居た喇叭を、震ふ唇に押し當てゝ、突撃喇叭を吹き立てました。

その聲の勇ましさに、士氣はまた振ひ立つて、ドツと突撃にかゝりましたが、此時又も一個の銃丸は、宙を切つて飛んで來て、喇叭を持つて居るその右の手を、會釋も無く撃ち貫きましたから、鮮血サツと迸つて、喇叭はカラリと地に落ちたのです。

けれども其人は尚屈せず、よろぼひながら喇叭を尋ね、今度は左の手に拾ひあげて、又一と吹き吹き立てましたが、その壯烈な突撃喇叭も、次第に聲が弱つて行き、果は途切れてしまひましたので、走り寄つてこれを見ましたら、無

永井芳太郎
池月少尉の最期

慘やこの喇叭手は、その左の手をも擊たれて居ました。

嗚呼十八聯隊の突擊　その突擊は効を奏して、程無く敵陣を占領しました。が、その突擊の令を傳へた、勇烈無双の喇叭卒は、その喇叭の音と共に、その息をも絶たれたのであります。

姓は永井、名は芳太郎！　こ　勇烈なる喇叭卒は、永く芳名を傳へずには居りません。

七　池月少尉の最期

軍人として戰場に出るからは、元より死は覺悟の前です。が、老前長い年少士官の、前途に數多の希望を持ちながら、その初陣の犧牲と成つて、蕾のまゝに散つてしまふ程、世

福島少將の二男福島二郎
池月（佐々木の馬の名）

にも痛はしい事はありますまい。

彼の西伯利亞の單騎旅行に依て、雷名を世界に轟かした福島安正の二男、少尉福島二郎の如きも、正にその一人として、人の涙を催さしめるのであります。

少尉は第一軍に從ひ、征露の大軍に先鋒として、鴨綠江の戰爭の時から、已に幾多の危險を冒し、而も幾多の勳功を樹てながら、この遼陽の攻擊に至るまで、一度も怪我をしませんでした。

殊に靉河の偵察の際は、少尉直先に馬を躍らせて、よくその水流を見屆けましたので、彼の宇治川の佐々木を思ひ出させ、爲めに池月少尉の名を博した位です。

然るに八月の三十日、少尉は大多和大隊長の下に、徐家

死すとも戰友の側を去らず

死に臨んで部下を勵ます

所へ連れて來やうとしますのに、少尉は猶手を振りて、

『此所で死ねば本望ぢや。死ぬまで戰友の側は離れん。』

と、頻りに踏み止まらうとしますのを、部下の者が寄つてたかつて、戰場から擔いで歸り、やがて野戰病院に入れましたが、元より重傷の事ですから、自分でも覺悟を定め、身は病床にありながら、尙部下の者を集めて、

『貴樣等は生存して、增々國家に御奉公せよ。乃公は今、空しく滿洲の土と成るが、靈魂は永く留まつて、貴樣等と共に國家を守護するぞ。』

と、勇ましい言葉を殘して、片頰に笑を浮べたと思ふと、その儘呼んでも歸らぬ人と成りました。

あゝこの名譽の戰傷、見事の最期！　同じく戰場に在つ

溝の敵に當り、半永久的の防禦工事を破つて、激しく突擊を試みますと、敵は兼ねて待ち構へて居て、猛烈なる一齊射擊を喰はせ、その爲め我が大隊は、見る〳〵中に三百名許り、算を亂して斃れました。

此時少尉は、部下の一個小隊を提げ、蝗の樣に飛んで來る、無數の敵彈を事ともせず、『進め〳〵！』と叫びながら、眞先に進みましたので、他の中隊もこれに勵まされ、同じく力を合せまして、遂に敵の陣地を奪ひ、此所に日章旗を立てる事が出來たのです。

すると、その戰爭の最中の事です、何所からとも無く飛んで來た敵彈は、少尉の腹部を貫通して、其場へドウと倒しましたから、從卒は驚いて、直ちにこれを介抱し、繃帶

父を辱めぬ子

て此の報を聞いた、父少將の胸の中、果して如何でありましたらう？

子として父を辱めぬ、二郎が名譽ある此最期を、父は只喜んだ許りでせうか？

死して放さぬ武器

八　死して放さぬ武器

松本伍長（辰平）

死ぬまで喇叭を吹き通した、彼の永井喇叭卒にも劣らぬ、壯烈な戰死を遂げたのは、大久保縱隊に屬して居た、丸山中隊の伍長、松本辰平と云ふ人であります。

平素は至つて溫順な質でしたから、隨つてその部下にも、大いに心腹されて居りましたが、一旦戰場に現はれると、その膽力衆に優れ、敵彈雨の如く降る中も、さながら平地

腹部に命中

を行く樣に、少しも騷ぐ色はありませんでした。

八月三十一日の曉方、例の首山堡攻擊の時の事です。伍長は恰も陣頭に立つて、味方を勵ましながら進んで居りましたが、其中に一發飛んで來た彈丸は、その腹部に命中しました。

けれども初は氣が付かず、尙二三十分の間は、奮擊突戰して居りましたが、何分腹部の傷口からは、血が夥しく流れ出て、その爲めに氣も遠く成り、今は身體も利かなく成りましたから、もう是までと覺悟を極め、

『天皇陛下萬歲！』

と、一聲高く叫ぶや否、バツタリ倒れてしまひましたが、その時は混戰の最中で、誰も氣が付かなかつたのでありま

伏射の姿勢

丸山大尉（祐四郎）

す。

やがてその翌日の事、我軍は見事首山堡を占領し、戰場の掃除に掛りますと、數多ある死體の中に、兩手に銃を正しく持つて、伏射の姿勢を取つたまゝ、敵壘の方を頭にして、立派に死んで居る者がありますから、よく調べて見ましたら、是こそ松本伍長でありました。

人々は感心して、その死體を扶け起し、篤くこれを葬らうと云ふので、まづその銃を放たうとしますと、こは如何にその銃は、兩手に堅く握られて、容易に放す事が出來ませんでした。

茲にまた、此中隊の指揮を執つて居た、大尉丸山祐四郎は、其後九月三日の激戰に、遼陽停車場の近邊で、同じく

死して放さぬ武器

重傷を負て戰闘を監視す

敵彈を腹部に受けて、其場に自由を失ひました。

けれども大尉は少しも屈せず、驚いて飛んで來た從卒を、

『乃公の介抱は後でもよい。一時もはやく中隊に追ついて、脇山少尉に後を賴め！』

と、云つて側へ寄せ付けず。尙軍刀を杖にして、中隊の進擊を見送り、擔架卒が扶けに來ても、

『乃公は斃れるまで戰線は退かん。』

と、頑固に云い張つて戰闘を監視し、味方の勝鬨を揚げるのを聞いて、初めて後へ送られたと云ひます。

此隊長を上にしてこそ、初めて松本の如き勇士も出るので。又その將を辱めぬ者であります。

附錄 **軍國讀本卷の九** 完

遼陽の卷

定價金拾貳錢

明治卅八年二月廿五日印刷
明治卅八年三月　日發行

不許複製

著者　巖谷季雄　東京市日本橋區本町三丁目八番地
發行者　大橋新太郎　東京市京橋區築地三丁目十五番地
印刷者　野村宗十郎　東京市京橋區築地二丁目十七番地
印刷所　株式會社東京築地活版製造所

發兌元　東京市日本橋區本町三丁目　博文館

小波山人　巖谷季雄君編

少年日露戰史

附軍國讀本

大判洋裝厚表紙
脊クロース
一冊約一百餘頁

▲各洋裝脊クロース並製大判百餘頁正價金拾貳錢●六冊前金六拾七錢●十二冊金壹圓廿八錢　郵稅一冊四錢宛▼

第一編 開戰の卷

▲戰爭の起因
▲三國の干涉
▲露國の無法
▲露西亞は何な國
▲文明と野蠻の戰
▲艦隊の出發
▲仁川の勝利
▲旅順の攻擊
▲宣戰の詔勅
▲國民皆兵
▲擧國一致
▲新艦の到着

附錄 軍國讀本
●葉山の御夢●東洋のネルソン●三殿下の御勇戰●敵前の尺八●殘る劍●軍歌旅順の海戰●下瀨火藥の事●初瀨の初花

第二編 決死隊の卷

▲日韓の條約
▲閉塞の計畫
▲決死隊の出發
▲決死隊の行動
▲驅逐艦隊の激戰
▲間接射擊
▲第二回の閉塞
▲閉塞の成效
▲マカロフの戰死
▲行軍の困難
▲騎兵の奮戰
▲露艦の亂暴

附錄 軍國讀本
●決死隊の歌●勇士の膝枕●機關兵の沈勇●軍神の歌●氷割の勇士●大切な軍艦旗●子供好の中尉●斥候の犧牲

第三編 九連城の卷

▲鴨綠江の地理
▲海軍の應援
▲架橋の掩護
▲江上の大砲戰
▲九連城の總攻擊
▲九連城の陷落
▲蛤蟇塘の激戰
▲敵兵の同志討
▲諸兵の苦心
▲金州丸の事
▲捕虜の厚遇
▲鳳凰城の占領

附錄 軍國讀本
●黑木大將●牧澤中尉の苦戰●九連城は占得たり●大膽な斥候將校●武士の情●裸體の武士●志士の不運●戰場物語

第四編 南山の卷

▲第三回の閉塞
▲閉塞の成效
▲上陸の困難
▲普蘭店の鐵道破壞
▲大戰前の小衝突
▲金州の占領
▲南山の大激戰
▲南山の占領
▲第二軍の名將
▲青泥窪占領の奇功
▲大連灣の掃海
▲嗚呼吉野、初瀨

附錄 軍國讀本
●南山攻擊●伏見宮殿下の御武德●鳥海艦長●勇猛士官●宮本武藏の末孫●友愛の嬉淚●決死の志願

第五編 得利寺の卷

▲恨は深き玄海洋
▲常陸丸と佐渡丸
▲和泉丸と羽後丸
▲上村艦隊の苦心
▲第二軍の新行動
▲得利寺とは何所
▲龍王廟の騎兵戰
▲得利寺の激戰
▲中央隊の戰況
▲左翼隊の戰況
▲右翼隊の戰況
▲戰爭の結果

附錄 軍國讀本
●君前の星野少佐●聯隊旗を燒く●不運なる上村中將●敵將士の自殺●騎兵の奮戰

第六編 摩天嶺の卷

▲大孤山上陸軍
▲岫巖の占領
▲賽馬集の掃清
▲張家石の激戰
▲炎天の行軍
▲分水嶺の戰鬪
▲摩天嶺の逆襲
▲二度目の逆襲
▲武運強き馬場大佐
▲橋頭の大戰
▲滿洲軍總司令官
▲天と時と人の和

附錄 軍國讀本
●第一軍の兩殿下●大庭少佐の詩●海門艦長の最後●滿洲の蠅●勇猛無比の若武者●自ら敵陣に餓死す●兵にも豪傑●不思議の勇士

第七編 大石橋の卷

▲熊岳城の逆襲
▲蓋平の占領
▲大石橋の敵
▲砲兵の苦戰
●右翼隊の大夜襲
▲月下の血戰
▲彼我の損害
▲營口の占領
▲柝木城と海城
▲楡樹林子と樣子嶺
▲ケルレルの戰死
▲伊豆沖の敵艦

附錄 軍國讀本
●野津大將●日本人は日本人●詠詩三章●壯烈橫山大尉の戰死●勇將の下に弱卒なし●剛膽なる井上大尉●身を捨てこそ極樂もあれ●脇腹に劍の尖

第八編 黃海の卷

▲珍らしや敵艦の出港
▲水雷艇隊の夜襲
▲哨艦攻擊
▲龍王塘と鮮生角
▲三驅逐艦の勇戰
▲待ちに待つた敵
▲三笠の勇戰
▲敵艦隊の敗走
▲逃走の敵艦
▲ノウヰックの最期
▲蔚山沖の海戰
▲リユーリックの擊沈

附錄 軍國讀本
●勇壯なる博恭王●伊知地三笠艦長●隱れたる司令長官●上村中將の博愛●軍艦名寄の歌●寺島中尉の組打●軍艦の說明●勇士水雷を抱く

續刊豫告
●第九編 遼陽の卷
●第十編 沙河の卷
●第十一編 旅順の卷(上)
●第十二編 旅順の卷(下)

少年讀本

全部五十冊

壹冊 正價拾參錢 郵稅四錢

少年讀本は一冊讀切にして、其記する處は、本邦近世の英雄、豪傑、高僧、烈婦人、學士等の傳記にして、一冊一人を限り、筆者皆當代の文章家なり、行文平易流暢、眞に少年讀本の名に負かざるべく、讀みもて行く內人をして志氣を振興し、心胸を開拓し、拍案快と呼び、擊節妙を叫ばしむべきものあらん、其の筆下風雨を起し、紙底鬼神を泣かしむるの慨、未だ必ずしも贅せず、苟も有爲の志を抱く少年讀者諸君は、購讀して海濶天空的氣象を養ひ、轉乾旋坤的事業を爲すの端緒を爲せ、

第壹編 ●高島秋帆 福地櫻痴君著 第二十六編 ●周布政之助 堺 枯川君著
第貳編 ●白河樂翁公 中邨秋香君著 第二十七編 ●荻生徂徠 內田魯庵君著
第參編 ●河井繼之助 戶川殘花君著 第二十八編 ●松平伊豆 森山吐虹君著
第四編 ●三條實美公 依田學海君著 第二十九編 ●中江藤樹 國府犀東君著
第五編 ●曲亭馬琴 饗庭篁邨君著 第三十編 ●島津齊彬公 春山鶴峰君著
第六編 ●井伊掃部頭 巖谷小波君著 第三十一編 ●高野長英 干河岸貫一君著
第七編 ●山田長政 遲塚麗水君著 第三十二編 ●橋本左內 桐生悠々君著
第八編 ●錢屋五兵衞 桐生悠々君著 第三十三編 ●釋月性 干河岸貫一君著
第九編 ●春日局 岸上質軒君著 第三十四編 ●平野國臣 白河鯉洋君著
第十編 ●水戶烈公 野口珂北君著 第三十五編 ●熊澤蕃山 幸田成友君著

第十一編 ●桐野利秋 春山鶴峰君著 第三十六編 ●雲井龍雄 玉木椿園君著
第十二編 ●藤田東湖 大和田建樹君著 第三十七編 ●野中兼山 北村香陽君著
第十三編 ●伊能忠敬 幸田露伴君著 第三十八編 ●大鹽平八郎 堀紫山君著
第十四編 ●新井白石 武島羽衣君著 第三十九編 ●佐久間象山 塚本澁柿園君著
第十五編 ●水野越州 中村桂軒君著 第四十編 ●小栗上野介 勢多章之君著
第十六編 ●池大雅 田山花袋君著 第四十一編 ●阿部伊勢守 熊田葦城君著
第十七編 ●木內宗吾 松原廿三階堂君著 第四十二編 ●松尾芭蕉 國府犀東君著
第十八編 ●西鄕隆盛 川崎紫山君著 第四十三編 ●石川丈山 田岡嶺雲君著
第十九編 ●阪本龍馬 阪崎紫瀾君著 第四十四編 ●德川吉宗 草野正義君著
第二十編 ●橫井小楠 大野洒竹君著 第四十五編 ●烈女お藤 藤本藤蔭君著
第二十一編 ●貝原益軒 石原笠堂君著 第四十六編 ●林子平 松居松葉君著
第二十二編 ●渡邊崋山 渡邊霞亭君著 第四十七編 ●塙撿校 長谷川天溪君著
第二十三編 ●中濱萬次郎 石井研堂君著 第四十八編 ●本居宣長 落合直文君著
第二十四編 ●近衞忠熙公 勢多章文君著 第四十九編 ●高田屋嘉兵衞 中村露冷君著
第二十五編 ●間宮倫宗 笹川文學士著 第五十編 ●大槻磐水 大槻如電君著

▲裝幀 洋裝大判石版彩色表紙 紙數一冊約百三拾頁

正價 ●一冊拾參錢 ●十二冊壹圓參拾五錢 ●二十五冊貳圓七拾錢 ●全部五十冊五圓拾錢 郵稅一冊金四錢宛 ▼

參謀總長元帥山縣侯爵題辭

大本營陸軍部 許可

日露戰役 紀念寫眞帖

第壹卷 既刊 第貳卷 最近發行

洋裝大判總クロース金文字金模樣表紙每號寫眞銅版百面アート紙彩色寫眞十枚挿入

定價一册金壹圓貳拾錢 小包送拾五錢

本書は空前の壯擧たる征露戰役の眞相を活寫して永く天下後世に傳へんが爲めに大本營陸軍幕僚の御藏版に係る撮影を蒐め精巧美麗なる寫眞銅版となして逐次發行するものにして、第一卷收むる所は第二軍の遼大澳上陸より金州南山の激戰、ダルニーの占領、得利寺の奇捷、偖は蓋平大石橋の敵戰を經て、營口占領に至る迄の戰況風光を網羅して遺す所なく、此等の諸寫眞は他に絕無にして獨り本館に於てのみ之を有する者、加ふるに製版は斯術に於て海內無比の稱ある所の關西印刷合資會社の手に成り裝幀亦優雅堅牢を旨としたれば眞に絕好無二の紀念帖たり、宜しく家々人々一本を備ふべきの寶典也

正價金貳拾錢 郵稅貳錢

附錄（●其一 旅順附近戰闘詳圖 地圖（●其二 旅順要塞詳密圖

○旅順口攻撃艦隊の諸將
○旅順口攻撃艦隊の諸艦と艦長（其一）
○旅順口攻撃艦隊の諸艦
○乃木攻圍軍司令官最近の筆蹟（其二）
○外に福原霞外君、英人二氏、山中古洞君、中澤弘光君、若林一等水兵、木村光太郎君筆……戰爭實寫畫

博文館 編輯局 編纂

旅順降伏紀念帖

○二百三高地より旅順口港內下瞰（二百懸け）
○露國關東要塞司令官陸軍大將ステッセル少壯時代以降の寫眞六種
○旅順口攻撃軍諸將
○攻撃右翼軍の猛將
○攻撃軍中堅の勇將
○攻撃左翼軍の勇將
○旅順口攻撃軍將校

口繪（旅順降伏兩軍全石版（權委員の會見
旅順從軍畫家東城鉦太郎氏筆
○旅順口攻撃軍の主腦
○同攻撃艦隊の主腦
○旅順口攻撃軍師團長
○旅順口攻撃艦隊司令官
○旅順口攻撃旅團長諸將
○聯合艦隊參謀諸將

露國 レオ、トルストイ伯原著
日本田山花袋君譯述

哥薩克兵（コサック）

哥薩克兵!! 哥薩克兵!! 其名既に世に轟鳴して人其兵士の勇驍無雙なるを聞くこと久し矣、而して今や我國征露の劈頭に於て親しく此兵の强弱怯勇如何を目撃して國民の話頭に上り其件行々知らんことを欲ぜり乃ち本書を介して世の劉覽に供す。

全一册 洋裝 菊判 正價金拾八錢 郵稅四錢

高加索嶺の北、露領の最南端一國あり、「コサック」州といふ、多く美人を産す、世界第一の稱あり、是を以て露國士官の「アフリーク」に防禦の爲めこの州に送られたるもの、大概鶯鶯の盟を兵馬倥傯の間に締ぜざる者なし。レチ、トルストイ伯は露國の詩人、十九世紀錚々たる大詩人なり、而して其作「コサック」兵は實に此間の消息を陳べて神來の詩想を婉麗なる筆に描出したるものなり。讀み來れば忽ちにして砲聲忽ちにして美人、忽にして葡萄園下の逍遙となり、忽ちにして「アフリーク」人攻撃の出兵となり、忽ちにして戰闘大叫喚、少女の血涙となりて了る、凄絶慘絶、眞に不可言の妙あり。

博文館編輯局編纂（遞信省認可）

日露海戰史

太陽判二百四十頁 口繪寫眞版二十頁 正價金參拾錢 郵稅參

◎評論 海戰に關する內外評論家及軍人の開始の諸說を揭ぐ皆是剴切の文字より最も趣味多し
◎最近の戰況 に至るまで最も簡明に一讀人をして一讀く敍述し
◎本紀 海戰の經過を親睹するの感あらしめ讀み來つて端なく痛快と絕叫せしむ
◎戰場 揭げ精忠貫日の勳功を詳敍す
◎地理 に至る迄を揭げ我海軍の大捷を博するに至れる所以を知らしむ
◎史傳 海軍將校の列傳
◎雜纂 海戰に關する鮮明精確の圖を以て
◎軍器軍艦の說明 海戰の狀況を明示す
◎日誌
◎其他海戰に關する事項一切を網羅す

伊東軍令部長題辭 平田勝馬君著

（三版）

黃海大海戰

洋布上製六百五頁 正價金九拾錢 小包送貳拾錢

野津陸軍大將序文 藤野房次郎君著

（三版）

平壤包圍攻撃

洋布上製六百頁 正價金七拾錢 小包送拾五錢

野津陸軍大將序文　藤野房次郎君著

平壤包圍攻撃

洋布上綴八百頁
賣價七拾錢
郵稅拾八錢

平壤は八道第一の堅城にして、東洋無比の天險たり。加ふるに淸軍亦精銳を盡して死守す、歐米の人士皆以て期年を支ふべしとなせるもの、固より謬察にあらざりしならん、然るに何ぞ計らむ。我軍一擧之を陷る、神算鬼謀に是れ依ると雖も、將軍の剛猛絕倫なるを以てせざれば安んぞ能く如斯なるを得へき、聞てその戰鬪攻伐の壯快勇烈、天地を震動するの壯想見るべし、本書は當時從軍記者中錚々の名あり、筑紫散史藤野房次郎君が身親しく見る所により、更に攻城の諸將に質して作述せるものなれば、一讀さながら電光石火の間に身を置くの感あるべし

伊東海軍大將題辭　平田勝馬君著

黃海大海戰

洋布八五〇頁
正價九拾錢
郵稅二拾錢

征淸の一役、陸軍に於ける平壤包圍攻撃と對峙して最も壯快の觀を極めたるを、黃海大海戰とす。平壤包圍攻撃は曩に編述出版して、江湖の大喝采を博したり、今また本書上梓の運に遭ふ。篇中記する處一として當時戰に臨みし將校の直話に出でざる無く其雷轟電激の狀、雲湧瀾翻の態、眞に讀者をして汗を揑らしむ。顧みれば前後殆ど一年有半に涉る征淸役中に於て其將を斬り鷁を屠るの快戰勝けて數ふべからずと雖も、日淸勝敗の大勢を一決して終に我をして優勝の位置に立たしめたる所以のものは一に黃海の大海戰に我の能く全勝を占めたるに歸す是故に後世征淸の事蹟を知らむと欲せば必ず本書を讀て其海軍の消息を知るべし

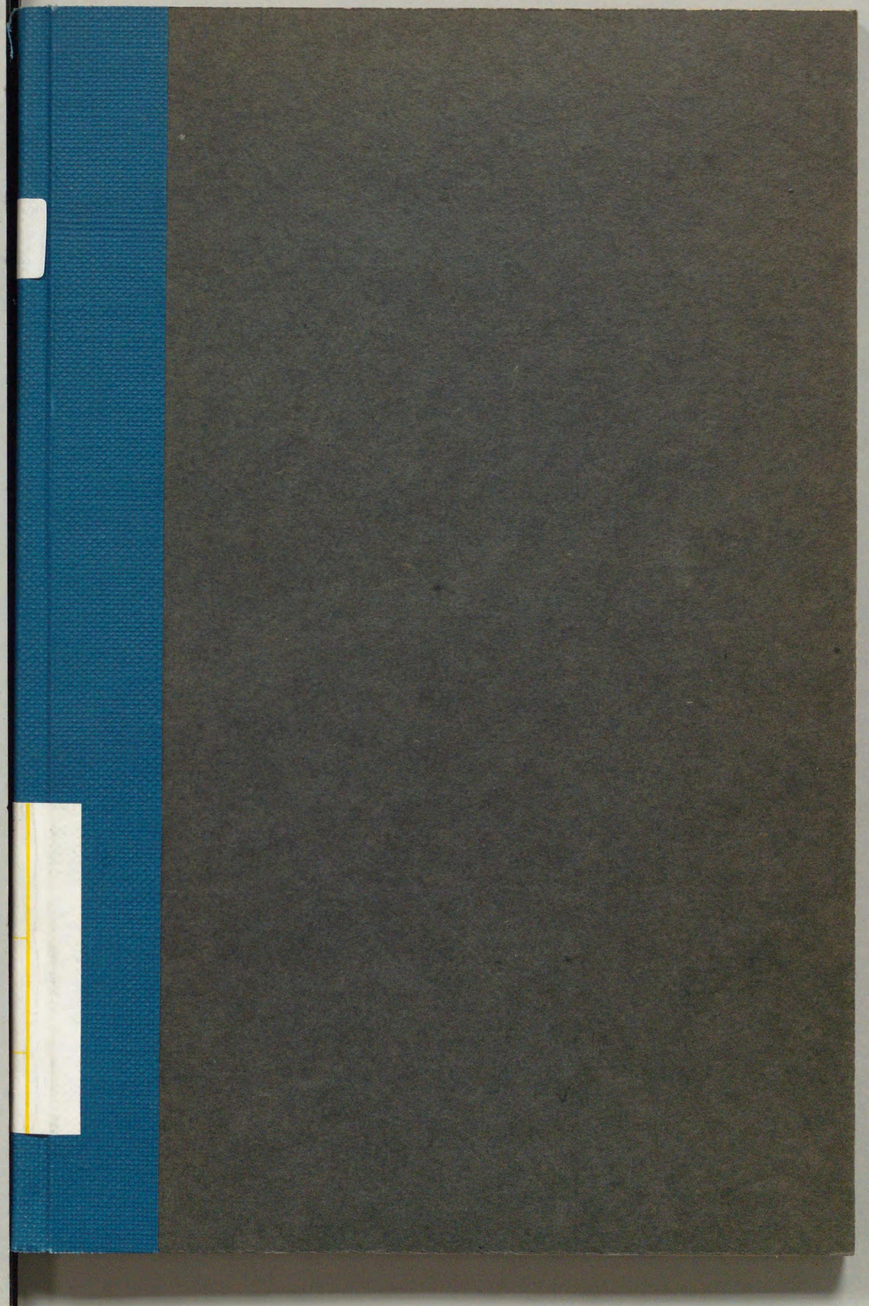
紫山　川崎三郎君著

增訂 西南戰史

全一冊洋布上綴　賣價八拾錢
大判一三五〇頁　小包送六百匁

明治十年の亂は關ヶ原役以來の大戰にして、維新中興の成就と、國民意向の趨勢とに至大の關係ありて、實に明治史中の一眼目なり。然るに世間其原因、結果趨勢を審かにし、完全なる西南戰史たるものなし、川崎紫山氏掬經營、精確なる幾多の材料に據り、且當時の士の目擊耳聞を參照して本書を著はす。

西南戰史始めて完書ありと云ふ可し。曩に一部十二卷として出版したるも、今藏架の便を計り增訂して壹卷とせり、讀者一たび眼を暴らさば、當時天下の大勢、對外の趨勢及び幾多世間未知の奇事等躍如として紙上に顯はれ、拍案快說を大呼せん

發兌元　東京本町　博文館

博文館